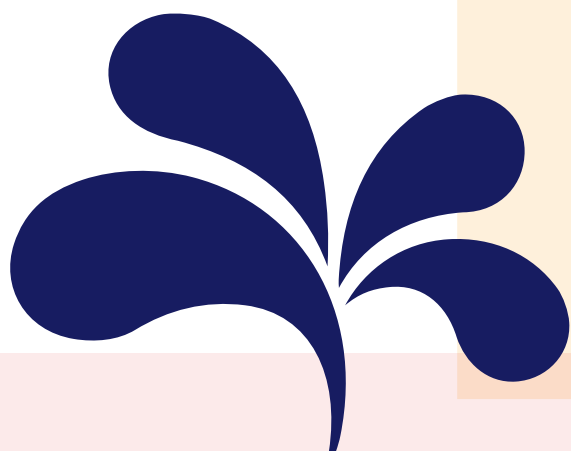




日本の心を世界に伝える
Conveying the Spirit of Japan

第16回 文化庁文化交流使活動報告会

文化庁文化交流使 フォーラム2019

Japan Cultural Envoy Forum 2019

報 告 書

第16回 文化庁文化交流使活動報告会

文化庁文化交流使 フォーラム2019

Japan Cultural Envoy Forum 2019

報 告 書

— 日本の心を世界に伝える —

Conveying the Spirit of Japan

目 次

文化交流使事業概要	P.2
文化庁文化交流使フォーラム 2019 議事録	P.5
活動報告	
プロフィール	P.16
大友 良英	P.18
鈴木 康広	P.20
種田 道一	P.22
本條 秀慈郎	P.24
増田 セバスチャン	P.26
文化交流使一覧	P.28

文化交流使事業概要 Overview



平成 29 年度 FY2017



photo by 佐藤類

① 大友 良英 Otomo Yoshihide

音楽家

活動期間 2017 年 10 月 31 日～ 12 月 13 日, 2018 年 2 月 1 日～ 2 月 15 日
活動国 アルゼンチン, チリ, ブラジル, メキシコ, アメリカ, イタリア, フランス



③ 種田 道一 Michikazu Taneda

金剛流能楽師

活動期間 2018 年 1 月 20 日～ 3 月 15 日
活動国 アメリカ, フランス, スペイン, イタリア, ハンガリー



photo by 中川正子

② 鈴木 康広 Yasuhiro Suzuki

メディアアーティスト, 武蔵野美術大学准教授,
東京大学先端科学技術研究センター客員研究員

活動期間 2018 年 2 月 12 日～ 3 月 16 日
活動国 アメリカ, カンボジア, ドイツ, アイスランド



④ 本條 秀慈郎 Hidejiro Honjoh

三味線演奏家

活動期間 2018 年 3 月 12 日～ 6 月 29 日, 9 月 2 日～ 10 月 17 日
活動国 トルコ, アメリカ, イタリア, フランス, イギリス, ドイツ, チェコ, ロシア



文化庁では、芸術家、文化人等、文化に関わる方々を一定期間「文化交流使」に指名し、世界の人々の日本文化への理解の深化につながる活動や、外国の文化人とのネットワークの形成・強化につながる活動を展開しています。文化交流使は、諸外国に一定期間（1か月～12か月間）滞在し、それぞれの専門分野で講演、講習や実演、デモンストレーションなどを行います。

平成29年度までに、伝統音楽や舞台芸術、生活文化やポップカルチャーといった多様な分野で活躍する芸術家、文化人等、延べ133人と、26組（団体）を82か国へ派遣しています。平成29年度は、下記の芸術家、文化人等を「文化交流使」に指名しました。

Since 2003, the Agency for Cultural Affairs, Government of Japan has sent artists and other cultural figures abroad to serve as “Japan Cultural Envoys,” with a view to deepening the international community’s understanding towards Japanese culture, and to forming and strengthening networks with people around the world active in the cultural arena. The Envoys stay in one or more countries for a specified period (between one month and one year) where they conduct lectures, courses, demonstrations or other activities in their cultural fields.

By the end of fiscal year 2017, a total of 133 individuals, and 26 groups specializing in various fields such as traditional music, performing arts, culture and lifestyle, and pop culture has been sent to 82 countries. The following artists and cultural specialists were appointed as Japan Cultural Envoys in FY2017.



5 増田 セバスチャン Sebastian Masuda

アートディレクター、アーティスト

活動期間 2017年9月21日～10月17日、11月1日～12月19日、
2018年1月2日～2月24日、3月3日～4月1日

活動国 オランダ、南アフリカ、アンゴラ、アメリカ、ボリビア、ブラジル

文化庁文化交流使フォーラム2019 議事録





大友良英氏によるオープニングアクト

開会挨拶

宮田 亮平

文化庁長官

文化交流使は、日本の幅広いジャンルにわたる一流の芸術家・文化人に、世界へ文化を運んでいただき、そして色々な国の素晴らしい文化を持ち帰ってもらうことで、世界中に文化のきずなをつくる活動です。私は、すぐ隣の東京藝術大学に50年おりましたが、この上野の山は文化の発祥地であり、文化を世界に発信していく場です。この地で交流使の発表がされることは大変意義深いものと思っています。ぜひ、今日お集まりの皆さまは、文化交流使の取り組みを「なるほど」と思いながら聞いていただき、今度は、皆さまが、世界に発信していく“行商人”の一人になっていただきたいと思います。

文化は、ものを伝え、心を伝えます。美しさ、悲しみをも伝えることができます。皆さんが、今日の感動をわが家へ帰って伝えよう、明日は隣の人へ伝えようと、つながりを持てれば、それほどいいことはありません。ぜひ、日本文化の素晴らしさ、奥深さを感じていただきたいと思います。



宮田文化庁長官による開会挨拶

活動報告

大友 良英

音楽家

主に南米のアルゼンチンとブラジルでの活動について、ご報告したい。リオ（ブラジル）の貧民街ファベラでは、クラシックを学んでいる子どもたちとともに、簡単なハンドサインで、様々な音楽を作っていく即興演奏のワークショップを行った。

私は、指揮やテレビドラマの音楽も多く作曲しているが、もともとのは出身は、即興演奏やノイズミュージックといったアングラ（アンダーグラウンド）と呼ばれる世界である。実は、日本のこうしたジャンルは、米国で『ジャパノイズ』という本が出ているほど有名である。

今回、文化交流使の任命を受け、「私は世界各国にどこでもいきます。私の音楽に興味のある方は返信ください。」とFacebookで呼びかけたところ、多くの返信があったが、その中でも一番反響が大きかったのが、中南米からであった。そこで、中南米にフォーカスを当てることにした。ブエノスアイレス（アルゼンチン）のクラブでは、パーカッション奏者であるサンチアゴ・バスケスが毎週企画している、指揮による即興アンサンブル「ラ・グランデ」に参加した。指揮による即興演奏はもともとニューヨークの現代音楽家のブッチ・モリスが1980年代に始めたコンダクションというシステムがもとになっている。

もともとはものすごく複雑で何度もリハーサルを重ねて出来上がる音楽であるが、私は、楽器を演奏したことのない人でも参加できる簡単なサインで即興演奏をするシステムを作り上げた。

私自身が福島育ちということもあり、東日本大震災後の



大友良英氏による発表

福島でも、このシステムにより、演奏が上手な人もまったく音楽をやったことがない人もいっしょに演奏ができるワークショップを実践してきた。それを中南米で試してみたのが、前述のファベラであった。あまりにもギャングの襲撃が多く、学校が撤退してしまった地域で、子どもたちとのワークショップを手伝ってくれたのが、真っ先にFacebookで私にコンタクトをとってきたブラジルのミュージシャン、フェリペ・ゼニコラである。

今回の活動では、こうしたワークショップやセッションを各地で数十回繰り返した。「これまでつながっていなかったアンダーグラウンドの人々のネットワークづくり」「楽器のできない人でも、ハードルを下げてクオリティは下げないワークショップ」という二本柱でやってきた。この10年ほどで、日本のノイズに影響を受けてきた人たちもたくさん集まり、各地で録音したものの成果も出つつある。その後、去年の夏、サンチアゴ・バスケスが日本に来てくれた。大河ドラマの音楽にも携わってくれた。今回の活動のご縁は今も続いている。

モデレータープロフィール

はな モデル・タレント

横浜市出身。2才からインターナショナルスクールに通い、17才からモデル活動を始める。上智大学進学後もモデル活動が続け、テレビやラジオ、エッセイの執筆など活動の範囲を広げる。現在もファッション誌で活躍するかたわら、FMヨコハマ「Lovely Day～hana金～」のナビゲーターや、日本テレビの毎週日曜日「夢の通り道」のナレーションも務めている。英語・フランス語に堪能で、その語学力を活かした絵本も多数。趣味はお菓子作りや茶道、仏像鑑賞。最新刊『はな、茶の湯に出会う』（淡交社）ほか、著書も多数。



はな 中南米に行って、ここを選んでよかったと感じたか。

大友 感じた。それまでメキシコまでしか行ったことがなく、普段、行きやすい場所でないほうがいいと思った。

はな 音楽のあり方に日本との違いは？

大友 ある。例えばブラジルはラッパ地区という地区があり、毎週月曜日には様々な音楽がそこかしこで演奏され、それに合わせて皆が踊っている風景はまるで祭りのようであった。最高だと思った。

はな 日本でも、上野公園や沖縄はそうかもしれない。それを日本全国に持ち込んだらどうなるだろうか？

大友 上野公園や沖縄はそうである。でも、日本ではそういう場所がどんどん無くなっている。思えば、私が子供だった昭和30年代の横浜の実家でも毎週末宴会で近所の人が集まって歌っていた。今はカラオケやロックフェスが音楽の場だから音楽がなくなったわけではない。でも、隣近所の付き合いが段々と薄くなって、かつてのような近隣のコミュニティと音楽が結びついている現場は少なくなった。その意味で音楽をやるという環境はブラジルにはたくさん残っていて、そこが素敵だなと思った。

はな 近年、ジャパノイズが世界に広がっているとか？

大友 すごく特殊に見えるのだと思う。日本の舞踏がモダンダンスに対して特殊なものと認知されたことに似ている。

はな 今後、日本でどのような活動をしていきたいか。

大友 私の音楽を伝えるのではなく、私がハブとなって、つなげる役になればいいと思っている。これまでつながりが全然なかった南米とアジア各国の音楽をつなげられればいい。例えば、ブラジルとインドネシアは、笑顔も音楽のあり方もよく似ている。言葉は多少の障害にはなるが、今はインターネットで音楽を伝えることもできる。日本文化の発信も大切だが、日本自体が様々な国や地域の文化をつなげるハブになっていくことが大切だと思う。

鈴木 康広

メディアアーティスト、武蔵野美術大学准教授、
東京大学先端科学技術研究センター客員研究員

今回、アメリカ、カンボジア、ドイツ、アイスランドへ行ってきた。これまでは身近な場所の中に新鮮な世界を発見し続けていきたいと思っていたが、今回、外へ飛び出すことによって、見るはずのなかったものを見る経験をしてきた。『空気の人』とは何なのかを考えて十数年経ったが、「もし

かして、これは僕の分身なのではないか？」ということに今回の旅で気づいた。あるいは、作品を連れていくために僕がいるのだ、という気持ちで旅をしてきた。

「近所の地球の旅～身近なものを介したミクロな文化交流～」をテーマに、皆が知っている子供の頃にあった身近な感覚を思い起こして、世界や日常の風景を変えていくという視点から文化交流使の活動を行った。

ニューヨークは、2003年にMoMA P.S.1のグループ展に参加し、僕がアート作品を発表するきっかけとなった都市である。「ニューヨーク」をテーマにしたワークショップを計画していたものの、荷物が税関で止められ、一切届かないというハプニングに見舞われた。やむを得ず、総領事館でのポスター展示のみとなったが、その結果、9/11メモリアルミュージアムやニューミュージアム等を視察する時間を得た。9/11メモリアルミュージアムでは、大きな衝撃を受けた。大変な現場がそのまま残されており、現代アートに見紛うばかりの、折れ曲がった鉄骨などが残されており、印象的であった。ニューヨークの街並みを写真に撮り、それを逆さにしてみると、青い空がニューヨークのビル群として浮かび上がってきた。訪れたアート関係者ともじっくり対話し、新たな展示のオファーもいただいた。また、セントラルパークで『空気の人』を浮かべることもできた。

カンボジアでは、王立プノンペン大学でJapan-Cambodia Kizuna Festival 2018に参加。全長6mの『空気の人』を展示するとともに、「見立て」のワークショップを2日間にわたって行った。言葉選びや風景の見方を共有できる日本人の繊細な感覚が、海外でも通用するのか、という試みだったが、クメール語に訳せない言葉や、カンボジアの人には伝わらない概念も多く難しい面もあった。また、トゥール・スレン虐殺博物館を訪れ、まだ近い過去のつらい歴史を目の当たりにして大変なショックを受けた。9/11メモリアル



鈴木康広氏による発表



『りんごのけん玉』紹介の様子

ミュージアムも同様であるが、その地の負の遺産を訪れて、『空気の人』の見方が変わった。『空気の人』が、重力から解放され、閉じ込められた強制収容所からも逃げ出せる1つの形に見え、人間存在における「自由」を問うものを感じられた。アンコール・ワットやバイヨン遺跡で『空気の人』を浮かべる貴重な機会もいただいた。

ベルリンでは、ベルリン日独センターの清田とき子氏に Haus am Waldsee のブローム・ベルグ館長を紹介いただき、改装中の美術館を視察。街での撮影中に日本でトークイベントやTV収録に参加したという人々から声をかけられ、見知らぬ場所で思いがけず“近所感”が出てきて感動した。ベルリンの壁にも『空気の人』を連れて行ったが、『空気の人』なら、ベルリンの壁を飛び越えることもできたと思った。その他、ブランデンブルク門やポツダム広場、ホロコーストミュージアムも訪問した。

アイスランドに『空気の人』を連れて行くと、そこは地球むき出しのエリアだと感じた。市立図書館で『空気の人』を展示したり、大使に『りんごのけん玉』を伝授したり、色々な人と交流した。2011年に「地球を開く」イメージで作った地球儀をよく見ると、レイキャビク（アイスランド）に到達していた。僕自身は、何も考えていないようで、何かを計画しているように感じられた。今後も、それを追いかけるように活動していきたい。また、日本のみならず世界の文化を船内に詰め込んだ巨大ファスナーの船で、世界を開くことをやってみたい。

はな 海外に出ていきたいタイプではないそうだが、文化交流使の任命を受け、どんな気持ちだったか。

鈴木 行くしかない、作品が出ていく手伝いをしなければ、と思った。

はな 鈴木さんの作品を見ていると、アートというのは余

白ばかりで、メッセージは受け取る側が決めていいのだと感じた。『空気の人』や『りんごのけん玉』を見た現地の人々の反応は？

鈴木 日本人と同じように身近なものという反応もあったが、日本語では一言で伝わるものも英語ではしっかりと説明して伝えなければならなかった。

はな 鈴木さんの作品は大変ユーモアがありますが、笑いは通じた？

鈴木 笑いのツボはなかなか通じなかった。ただ、『りんごのけん玉』に関しては、参加者が自ら面白さを見つけてくれた。

はな 鈴木さんは地球規模で色々と考えられています、日本人の心を世界へ伝えることについて、どう感じた？

鈴木 上手く解説できないが、多くのことを感じて僕の中で化学反応が起きている。また、帰国してから海外で展示する機会が増え、これまで行きたいと思えなかった海外に行こうという気持ちも強くなった。

はな そのような気持ちをこれからも作品に繋げていただくことを私たちも楽しみにしている。

種田 道一

金剛流能楽師

能は、通常20名ほどで公演を行うものである。しかし、1人でしかできないこともあるだろうと考え、アメリカ、フランス、スペイン、イタリア、ハンガリーを訪れ、55日間で31回の活動を行った。1つの自慢は、体調を崩すことなく、全てベストコンディションで回れたことである。

ロサンゼルスのお日本庭園では、早々にアクシデントに見舞われた。能はお囃子だけに合わせて舞うものがあるが、当日に披露するにあたって、日本から持参したお囃子を録音してあるはずのCDが鳴らないことが判明。ちょうどスマートフォンに録音していたことを思い出し、端末のスピーカーにマイクを当て、その場をしのいだ。現地の国際交流基金では、お囃子をUSBメモリにコピーしてくださった。このUSBメモリは、それからの旅において、パスポートの次に大事なものとなった。

ロサンゼルスはお茶が盛んで、お茶会にも招待され、その場でお礼に謡を披露し、国際交流基金のホールやカーペット敷きのロサンゼルス郊外にあるポモナ・カレッジの昼食



種田道一氏による発表

会場など様々なところで能を披露した。

フランスへ行くと、パリの日本文化会館で香席や茶席を催し、それぞれにふさわしい謡を披露。『土蜘蛛』等の公演や講座を開くこともできた。続いて訪れたのは、スペインである。バルセロナ演劇学院でパフォーマンスを披露。ワークショップには、ピエロをやっているという男性が、自身が持っている能面と打掛を着用して参加されるなど、キャラクターの濃いイベントとなった。また、マドリードの王立高等学校において、日本スペイン外交関係樹立150年のイベントの1つとしてパフォーマンスできたことは、喜ばしいことである。

イタリアでは、ベネツィアのサン・ジョルジョ・マッジョーレ聖堂で能を披露。ベネツィア大学の学長にもお会いした。ブダペスト（ハンガリー）の映画・演劇学校では、最後の稽古が終わると、学生たちが民族舞踊を披露してくれ、とても感動した。なお、バルセロナで散髪した髪型は、Facebookでも大変好評であった。

はな 文化交流使の指名を受け、どう感じたか？

種田 若い人が選ばれると思っていたため、驚いた。

はな ヨーロッパは日本の文化に比較的理解がある印象があるが、現地の人たちは、どのようにして能に興味を持れたのか。

種田 もともと演劇大学等で学んでいる人たちだったため、知識があった。その中で650年続いている演劇である能には興味を持っていたようだ。

はな 能を生で見て、現地の皆さんの反応は？

種田 「silencio（静寂）」という言葉がある。激しく舞っても、スペインのピエロさんは「silencioだ」と言っていた。能は「幽玄^{ゆうげん}」と言って「奥深く幽かに静か^{かす}」が理想であるが、この幽玄を理解していただき、嬉しかった。

はな 今後、日本でどのように能を広めていくのか。

種田 色々と得るものがあった、幅が広がった。言葉の通

じない海外でも大丈夫だったのだから、日本であれば、もっと通じるはずである。若い世代にも能の世界を見せていきたい。

本條 秀慈郎

三味線演奏家

私は、三味線による現代音楽を活動のメインとしている。現代の作曲家に委嘱し、三味線の独奏曲や三味線と他の楽器とのアンサンブル、あるいは三味線とオーケストラの曲等を書いてもらい、次の世代へレパートリーを広げていくことが、自分の使命だと感じている。

今回、文化交流使の任命を受け、真っ先に考えたのは、初めて訪れる地で、その地に根を持つ演奏家とともに、各国の興味深い作曲家をピックアップして委嘱し、コンサートを行って新たな三味線の作品を創造することであった。そのために、これまで自分が作り上げてきたレパートリーは一切封じ、ゼロからスタートしようと考えた。

渡航前の段階で、フランクフルトのアンサンブル・モデルン、パリのアンサンブル・アンテルコンタンポラン、ニューヨークのインターナショナル・コンテンポラリー・アンサンブルの3団体との共演が念頭にあった。世界中で知らない人はいない演奏家団体であり、作曲家にとっても、彼らに作品を演奏してもらうことは誉れである。実際、彼らと共演することで、素晴らしい作曲家たちへの委嘱が叶い、この文化交流使の活動で21曲もの新しい作品が誕生した。これは、文化庁が作り出した日本の宝といえる。どれほど感謝しても、感謝しきれない。

まずは、三味線のルーツを知りたくてトルコに赴いた。



本條秀慈郎氏による発表

トルコでは、音楽は祈りであり、至福であり、生活の一部であることを確認した。また、トルコでも作曲を委嘱することができ、人類が三味線に初めて触れたときの感動、という変わったテーマで曲を作ってもらうなど実りあるスタートを切ることができた。その後、ニューヨークへ飛ぶことになり、自分のコネクションを使って活動を行った。ジャズの飛び入り演奏や、アート作品の前で演奏するために作曲してもらうなど面白い試みが多くあり、「明日、ちょっと演奏してくれない？」というのがニューヨークの特徴である。初めての試みとして、小・中学校、大学で公演も行った。ニューヨークでは雅楽の楽器と三味線とチェロの曲も作ってもらった。

イタリアへ移ると、ミラノでサロンコンサートを行ったが、イタリアを意識してバッハを取り入れたところ、反応がいまいちであった。現代の奇抜な曲を演奏しても笑われたりして、必ずリベンジしたい国である。オペラ座では、カルテットと共演。パリでのアンサンブル・アンテルコンタンポランとの共演は、見事に打ちのめされ、レベルの差を痛感させられた。

一時帰国後、9月にはロシアへ渡った。その後、アメリカを回った後、ニューヨークでインターナショナル・コンテンポラリー・アンサンブルと共演。ダルシマーやファゴットと三味線の曲など今までにない編成の曲が生まれた。そして、ドイツでアンサンブル・モデルンとのコンサートを行うなど、委嘱曲と戦い続けた6カ月であった。まぎれもなくこの旅で生まれた21曲の新曲は、文化庁が発信された信号が各国に点灯して生まれたもので、日本の財産になるものであると同時に、アンサンブルとの共演というものは、三味線にとっても新たなスタートであり歴史になると思う。そこに関わったことに感謝申し上げたい。

はな 今回、文化交流使に指名され、どう感じたか。

本條 最初は、よく分からなかったが、三味線のレパトリーを広げることに、全てを賭けようと思った。

はな 8か国ということも多く、多くの国に訪れた。私は三味線の音を聞くと日本だな、という意識を感じるが、海外の人は、三味線の音色をどう感じるのか。

本條 意外と、日本の楽器という意識はほとんどないようだが、1音チンと鳴れば、静まり返る。三味線の持つ音のエネルギーはすごいと思う。「あなたはこの旅で三味線をより好きになる。」と師匠に言われたがそのとおりであった。

はな イタリアの話が興味深かったが、イタリアでは現地の曲を弾いても響かなかったとか？

本條 反応が悪かった。しかし、最新のエネルギーがある音楽を弾いたところ、がらっと変わって静まり返った。それはどの国でも同じで、いい曲を、いい演奏をすると観客は静まり返る。

はな 今回の活動は、今後の日本での活動に、どのような影響を及ぼしたか。

本條 不思議と、日本のことをもっと知りたいと思った。三味線を広めるというよりは、三味線という楽器の素晴らしさを知ってもらうことが大事だと思う。今後は、出来上がった曲を整理し、何度も演奏して消化していきたい。

増田 セバスチャン

アートディレクター、アーティスト

文化交流使に僕を選ぶということは、ポップカルチャーの担い手を世界へ送り出すということである。それは文化庁にとっても、チャレンジだったと思う。これまで伝統芸能や工芸など、日本の文脈において功績が称えられてきた方ばかりの中で、ポップカルチャーという、ごく最近出てきた分野から、まさか文化交流使として世界に派遣してもらえるとは、思ってもいなかった。

自分にとって、文化交流使としての目的は「日本発のポップカルチャー「KAWAII」について認識を深めること」「各国の研究者、コミュニティ、次世代フォロワーとコミュニケーションすること」「巡って、それを自身のアーティストとしての活動につなげていくこと」の3つであった。

今回の旅では、オランダ、南アフリカ、アンゴラ、アメリカ、ボリビア、ブラジルを訪問。2014年から行っているアートプロジェクト「タイム・アフター・タイム・カプセル」



増田セバスチャン氏による発表

を各地で実施することにした。ハローキティといったキャラクター型の透明のタイムカプセルに、20年後へのメッセージを書いて入れてもらい、可愛くデコレーションしていく。それを各国で設置し、2020年の東京オリンピックイヤーに一堂に集め、大きな平和のモニュメントにしようというものである。

ブラジルのジャパン・ハウスで行った同プロジェクトには、1日で800人が集まり、過去最高の入場者数を記録。「KAWAII」好きなローカルのコミュニティの人たちが、ボランティアとして手伝ってくれた。ボリビアは富士山より標高の高い地域で、こんなところに「KAWAII」なんてあるのだろうかと思っていたが、「カズミ」と名乗る女の子の呼びかけで、チリ、ペルーなどから国境を越えてやってきた混合チームが力になってくれた。南アフリカはヨーロッパの影響が強く、「KAWAII」文化もすんなりと受け入れられていた。アンゴラにも日本のカルチャーは浸透していて、基本的な情報では飽き足らず、「今の日本をもっと知りたい」という声があがったほどだ。この世界中に広がっている「KAWAII」が持つパワーとは、何なのか？ それを考えるためにアムステルダム（オランダ）で行ったのが、パフォーマンス作品「ESCAPE FROM ANONYMOUS (E)」である。これには、人員や資金の他、物的支援も多く集まり、来場者は1,000人を超えた。

アートには、作品を売った買ったではなく、時代を変える根本的な力があるに違いない。それを再確認できた「ESCAPE FROM ANONYMOUS (E)」は、現地のストリートアートミュージアムにアーカイブされることが決定した。「KAWAII」の定義は「自分だけの小宇宙、それを愛でること」だと思っている。そこに日本人が脈々と培ってきた思想を次世代につなげていきたい。

帰国後は、寺田倉庫、横浜美術大学、京都造形美術大学、NYやアムステルダムの大学と連携していて、今実験的にオランダの大学生をインターンとして私のアトリエに呼んでおり、次は私のアトリエから大学生を送り、エクステンジのかたちにはできないか画策している。

はな 今回、文化交流使に指名され、真っ先に何がしたいと思ったか。

増田 個人的なことを言えば、今の自分に必要なものをデリートして人生を再起動し、純粋なものをクリエイティブしたいと考えた。

はな 「可愛い」には色々な意味があるが、海外で「KAWAII」というと、増田さんが築いてきたポップカルチャーを指していると思うか？



はな氏によるインタビューに応じる増田氏

増田 海外の人は「KAWAII」を、日本のクリエイティブなものへの感嘆詞として使っている。

はな 日本人の心として、どのようなことを伝えたいか。

増田 日本人は、物事を緻密に繊細に進めていく。だからこそ、色々なものが生まれていく。「ノーと言えない日本人」こそ素敵だと思っている。日本から生まれたものが、世界中で必要とされていることを誇らしく思う。

はな 次の世代に、どういうつながり方をするのか。これから楽しみである。

増田 生まれた時からインターネットや携帯電話のある、まったく違う考え方の人たちがこれからの世代。そこへ上手くつなげてあげるのが、大人の役割だと思う。

トークセッション

はな 皆さん、移動時間の長い生活だとか？

大友 年間1カ月ほどは、飛行機の中にいる。すごく嫌だ。増田さんも長いのではないかな？

増田 空港にいる時間を入れると、もっと長いかもしれない。

はな 皆さんのお話を聞いた感想は？

宮田長官 鈴木さんの巨大ファスナーの船は、実際に見たことがある。実は作っているのを見た。今度は、閉じるファスナーを作ってはどうか。

鈴木 閉じるアイデアとして、地面に刻んでいくキャタピラーを考えたことがある。つまりは水陸両用だ。ただ、ファスナーの船は境界線を開いたあとに消えていくのがいいと言われたことがあるが、残っていく境界線にはいいものがあるのだろうか？

宮田長官 どうなんだろうか？その辺も含めて、日本でやるだけでなく、世界でやることで、いかにおもしろいアイデアを考えつくか。そこが大切である。大友さんのハンドサインもそうだと思う。即興演奏で全員がまとまっていた。



トークセッションの様子

はな 成功談だけでなく、失敗談も皆さんがお持ちのようである。

鈴木 通関で荷物が止められてしまったが、その分、別にやることを見つけれられた。アイディアも見つかり、次の機会にワークショップをやってみたいと思うようになった。

はな 鈴木さんの作品は街歩きが作品の一部になっている。

鈴木 街の中で見た瞬間を作品にするのは難しい。皆さんも活動の中で、「ここに立ち会ってくれている人がいたら」と感じたことがあったのではないだろうか？それを伝えるための、SNS などは確かにあるが、実はメディア技術はまだ対応しきれていない。おもしろい記録の仕方や、人を巻き込んで立ち会ってもらう仕組みなどが、あればいいと感じた。

はな 種田さんは CD が流れなかったが？

種田 何でも受け入れれば何とかなる。女子テニスの大坂なおみも全豪オープンで、自分を受け入れることで優勝した。ただ、私は伝統芸能という立場で決まったことをいかにしっかりやるかだが、その分失敗が絶対にはないのである。どのような環境であっても、それを受け入れれば例え絨毯の上でもできる。既に出来ているものを出すだけであるが、私には 65 年分の引き出しがあるので、何を出すかの準備周到は大事。今回はサプライズの飛び道具を持って行ったのが、成功のカギだったと思う。普通はお客さんには投げない。通常、能は観客に向けては行わないが、今回はお客さん向けに飛ばしたというのは、意外性があって喜ばれて良かったと思う。

はな 意外性という言葉が出たが、本條さんは今回の活動で意外性については？

本條 三味線という古典というか伝統については、型が決まっており、意外性はほとんどなく、私自身もそこを出そ

うとするとイタリアでの活動のように失敗する。どちらかと言うと第三者である作曲家に見出してもらうのが一番いいと考えていた。

はな 増田さんは今までやったことがなかったことをやってみよう、というのはあったか？

増田 これまでは、クライアントのニーズに合わせてアートをディレクションしていたが、今回の活動はそういうものに縛られなく、「アートって何だろう？」と、改めて考える機会を与えていただいた。自分の中身が、誰かと入れ替わったのではないかと思うほどの経験を積み、違うフェーズに入ったと感じている。受入れ先などのアレンジを自身で行う中で、飛行機が予定通り飛ばないなど、右往左往しながらプロジェクトを進めていくもの。そのような経験をさせていただいたからこそ、一流のアーティストがさらに強くなって帰ってくる。

大友 失敗の話をさせていただくと、一般の人とワークショップするときには「今日出す音は、全部受け入れられるから」と話し、失敗はないと伝える。一般的に成功とは、



交流使に語りかける宮田長官

成功例にいかにつづくかであって、そこに届かないと失敗というように思いがちであるが、大切なのは成功例を繰り返すことではなく自分たちで発見していくことが重要。ここでは失敗という発想はないはずである。音楽の場合はそんな発見を一人でするのではなく、複数の人間がアンサンブルをする中で見つけていくことが要である。

鈴木 アイスランドで『空気の人』を自分で追いかけていたら、ひどく転んで腰を打った。でも一瞬だけ自分も宙に浮いて空気の人になった。温水プールで展示をした際、予定されていた展示作品を変えたほうが確実にいいと気づいてしまい、これまで調整していただいていたため、言い出すのも怖かったが、思いきって提案したところ、作品がより良くなる方向に動いてくれた。言葉が通じない分、引っ込み思案になりがちであるが、目的をはっきりすれば、受け入れてくれるものだと感じた。

はな 日本の心を海外で伝えていくために、今後、何が必要と思われるか。

大友 一人の人間が日本の心を代表するのではなく、日本は決して一色ではない多様な文化があることを強みにして、世界の多様な文化の交流起点、ハブとなっていくような発想が必要だと思う。

鈴木 自分自身が、日本の心を知っていると思うべきではない。僕たちよりも、日本にまったく来たことのない人が感じられることもあると思う。自分で決めるのではなく、作品を介して日本のことを知る。あるいは、それを見た人

から、また日本のことを教えてもらう。そういったやりとりが、これまで自分にとって欠かせなかった。さらに人と共有するには、どうすればいいかを考える機会を今回いただいた。

種田 震災後、釜石で『高砂』を舞い、大変喜んでいただいた。能は「慰め」である。その場にふさわしい能を披露すれば、日本の文化でもある「慰め」も伝わる。それを今後も続けていきたい。

本條 三味線を一生懸命やることに尽きると思う。哀れみ、慰め、優しさを表すには、三味線に全てを託し、細胞のありとあらゆるものを使って、作っていかなければならない。日本人が日本人として戦うことが重要だと感じている。

増田 今の時代、インターネットによってボーダーが消え、2Dから3Dになっている。では、次の世代はどういう未来をつくっていくか。その媒介者として、この旅で関わった人たちと、日本のニュージェネレーションをエクステンジできるような仕組みを作りたいと考えている。

宮田長官 これまで16回開催しているが今回は最高だね。話を聞いていて、全く疲れない。本当に怪しくておもしろい。日本は、本当におもしろい国だということを、この5人の皆さんが伝えてくれている。天正遣欧少年使節団として伊東マンショらは8年かけてイタリアに渡り、日本の素晴らしさを伝えてきたが、皆さんにも通じる場所があった。

はな 皆さんの今後の活動を見守りながら、日本の心とは何なのか、どんな交流をしていけるのかを考えていきたい。



本條氏によるエンディングアクト



種田氏によるエンディングアクト

活動報告



photo by 佐藤類

大友 良英

音楽家

1959生。映画やテレビの音楽を山のように作りつつノイズや即興の現場がホームの音楽家。ギタリスト、ターンテーブル奏者。活動は日本のみならず欧米、アジアと多方面にわたる。美術と音楽の中間領域のような作品や、一般参加のプロジェクト、プロデュースワークも多数。震災後、故郷の福島での活動で2012年芸術選奨文部科学大臣賞芸術振興部門を受賞。2013年「あまちゃん」の音楽でレコード大賞作曲賞他多くの賞を受賞。2017年札幌国際芸術祭の芸術監督を務める。2019年NHK大河ドラマ「いだてん」の音楽を担当。

Otomo Yoshihide

Musician

Musician and producer. He is a cross-genre music maker actively performing free improvisation, noise-like works and pop, simultaneously and independently, on a global scale. As a film composer, he produced over 80 pieces of music for visual and film works. In recent years, he has been making musical pieces and organizing a unique style of concert, mainly in collaboration with various artists and regular citizens under the name of "Ensembles." Furthermore, he has been committed to music workshops with challenged children and participatory projects. He also attracts his activities beyond the borders of music, including "Project FUKUSHIMA!" which started after the Great East Japan Earthquake in 2011.



photo by 中川正子

鈴木 康広

メディアアーティスト、武蔵野美術大学准教授、
東京大学先端科学技術研究センター客員研究員

映像インスタレーション作品『遊具の透視法』（2001）がNHKデジタル・スタジアムで年間のグランプリを受賞。アルスエレクトロニカ・フェスティバルを皮切りに国内外の多数の展覧会やビエンナーレを巡回。『まばたきの葉』（2003）、『空気の人』（2007）、『ファスナーの船』（2010）など、美術館をはじめ公共空間へ展開する活動を続けている。「第1回ロンドン・デザイン・ビエンナーレ2016」に日本代表として出展。2014年に水戸芸術館、2017年には箱根 彫刻の森美術館で個展を開催。2014毎日デザイン賞受賞。

Yasuhiro Suzuki

Media Artist, Associate Professor of Musashino Art University,
Visiting Research Fellow of the Research Center for Advanced Science
and Technology, The University of Tokyo

He won the NHK Digital Stadium Yearly Grand Prix Award for his visual installation "*Perspective of Globe-Jungle*" in 2001. His installation traveled various exhibitions and art festivals in and outside Japan, including the Ars Electronica Festival. He creates works to be exhibited not only in museums but also in public spaces, including "*Blinking Leaves*" (2003), "*Aerial Being*" (2007), and "*Zip-Fastener Ship*" (2010). Suzuki exhibited representing Japan at the 1st London Design Biennale 2016. He organized a one-man exhibition at the Art Tower Mito in 2014 and the Hakone Open-Air Museum in Hakone in 2017. He received the 2014 Mainichi Design Award.



種田 道一

金剛流能楽師

能楽金剛流の職分家である種田家の四代目。1993年、京都市芸術新人賞を受賞。1998年、重要無形文化財（総合認定）に指定。1981年より、裏千家学園講師として能の講義を務める。また、小学生を対象にした能楽体験教室など、能の普及にも積極的に取り組んでいる。公益法人能楽協会理事、金剛会副理事長、茶道裏千家（茶名：宗道）種田後援会能主宰。カナダ、アメリカ、オーストラリア、フランス、イスラエル、ドイツ、スペイン、ポルトガル等海外公演多数。

Michikazu Taneda

Kongoh School Noh Actor

He is a member of the fourth generation of the Taneda Family, as a shokubun (the title given to the professional Noh performers at the highest level) family of the Kongō School of Noh. He received the Best Young Artist Award by City of Kyoto in 1993, and was designated as Important Intangible Cultural Heritage (General Certification) in 1998. He has lectured on Noh at the Urasenke Gakuen since 1981. He actively promotes Noh by providing a trial lesson course for elementary school students and through other activities.

He is also as a director of the Nohgaku Performers' Association, Vice-Director of the Kongoh School of Noh, Urasenke Chado (tea ceremony master name: Sōdō) and the Chair for Noh Performance of the Taneda Supporters' Association. He has given a large number of performances overseas, including in Canada, the U.S., Australia, France, Israel, Germany, Spain and Portugal.



本條 秀慈郎

三味線演奏家

本條秀太郎に師事し本條秀慈郎の名を許される。桐朋学園短期大学部卒業，在学中故杵屋勝芳壽に師事。現在同大学講師。Accフェロー受賞。故蜷川幸雄に演奏が絶賛される。文化庁芸術祭新人賞，出光音楽賞，京都青山音楽賞青山賞，宇都宮エスペール賞受賞。坂本龍一のアルバムに参加。ソリストとして各国オーケストラや，NOMAD，Avanti!，InterContemporain Soloists，Modernなど現代音楽アンサンブルと共演。ニューヨークタイムスに取り上げられる。

Hidejiro Honjoh

Shamisen Player

He studied under Hidetaro Honjyo, the head of Honjyo School, and was approved to use the name Hidejiro Honjyo. He graduated from Toho Gakuen College of Drama and Music. While in college, he studied shamisen under the late Katsuyoshika Kineya. He is currently serving as a part-time lecturer at Toho Gakuen College of Drama and Music. He also studied in New York under the ACC Nakamura Kimpei Fellow. His performance was highly praised by the late Yukio Ninagawa, a theater director. The awards that he received include the New Artist Award of the 70th the Agency for Cultural Affairs (ACA) National Arts Festival, the 25th Idemitsu Music Award, the Kyoto Aoyama Music Aoyama Award and the 12th Utsunomiya Espère Award. He also participated in recording an album by composer Ryuichi Sakamoto. As a soloist, he performed jointly with orchestras from various nations and a couple of musical ensembles dedicated to contemporary music such as Avanti!, InterContemporain Soloists and Modern. The performance was featured in The New York Times.



増田 セバスチャン

アートディレクター，アーティスト

演劇・現代美術の世界で活動後，1995年にショップ「6%DOKIDOKI」を原宿にオープン。きゃりーぱみゅぱみゅ「PONPONPON」MV美術，「KAWAII MONSTER CAFE」プロデュースなど，原宿のKawaii文化を軸に作品を制作。2014年より東京とニューヨークを拠点にアーティストとして活動。2020年に向けたアートプロジェクト「TIME AFTER TIME CAPSULE」を世界10都市で開催。著書『世界にひとつだけの「カワイイ」の見つけ方』。京都造形芸術大学客員教授，ニューヨーク大学客員研究員。

Sebastian Masuda

Art Director & Artist

He is a visiting professor for Kyoto University of Art and Design and Yokohama College of Art and Design. After active involvement in theater performance and modern art, he opened “6%DOKIDOKI”, a shop with the concept of “Sensational Kawaii” in Harajuku in 1995. Through the world tour titled “Harajuku Kawaii Experience,” which started in 2009, he has been working to spread Harajuku culture on a global scale. He gained worldwide attention for his PV production for “PONPONPON,” a debut single by Japanese pop icon “Kyary Pamyu Pamyu.” He has been active as an artist and art director, contextualizing Harajuku Kawaii Culture, for example, by producing a concept restaurant “KAWAII MONSTER CAFE.” His first solo exhibition “Colorful Rebellion – Seventh Nightmare -” was held in New York in 2014. He is working now to launch a participatory art project “Time After Time Capsule” in 10 cities around the world in 2020.



大友 良英

音楽家

活動期間 2017年10月31日～12月13日, 2018年2月1日～2月15日
活動国 アルゼンチン, チリ, ブラジル, メキシコ, アメリカ, イタリア, フランス

Otomo Yoshihide

Musician

Period of the activities: From October 31 to December 13, 2017 and from February 1 to 15, 2018
Countries visited: Argentina, Chile, Brazil, Mexico, the United States, Italy and France

photo by 佐藤類

中南米紀行



リオのファベラの子供たちとのワークショップ
My workshop with children in a favela in Rio

「私を呼びたい方連絡ください。地元の音楽家と共演したく…」と facebook に書き込んだのが 2017 年 2 月。反応の多くは中南米の即興やノイズ系の音楽家からでした。こんなに特殊音楽好きがいるのかということ、自分の音楽が地球の反対側にも知られ敬意を持たれていることに驚きました。今回は欧米も訪問しましたが、ここでは特に成果の大きかった中南米の中でもアルゼンチンとブラジルに絞ってレポートします。

ブエノスアイレスで出迎えてくれたのはピアニストのファビアナ・ガランテ。地元の音楽家たちとの即興セッションやレコーディング、大学の講義を組んでくれました。また重鎮ギタリスト、フェルナンド・カブサッキのアレンジで市の中心にある大ホールでサンチアゴ・バスケスをはじめとしたアルゼンチンの大物音楽家達とセッションを、地元のクラブではサンチアゴが長年継続しているアンサンブル La Grande にゲスト参加しました。私が芸術監督を務めるフェス「アンサンブルズ東京」にサンチアゴを呼び、日本版 La Grande も 2018 年 8 月後半に実現しました。

ブラジルは音楽の宝庫でもあり、また新しい形の即興演奏が私たちの音楽の影響を受けて今育ちつつある、そんな感触を受けました。私を出迎えてくれたのはリオのベーシストのフェリペ・ゼニコラをはじめとした各地の即興演奏家たちで、ブラジル各地で私が来たのにあわせていくつものフェスやレコーディ

ング、ワークショップや講演会が開かれました。リオ在住の大物音楽家アート・リンゼイとレコーディングが実現したのも嬉しい成果です。

何より素晴らしかったのは、リオの貧民街ファベラでクラシックを勉強している 100 人ほどの子供達 (6 ~ 18 歳) のグループ「Ação Social Pela Musica」とのワークショップでした。基本はクラシック、でもサンバパーカッションの子もいるところがブラジル独特です。常に犯罪の危険にさらされている子ども達が、音楽を通して社会と接することで悪い道に進まないように…指導者たちのそんな思いを背景に運営されています。私のワークショップは楽譜を一切使いません。誰かが出した音をきっかけに、誰かが指揮者となって、それをどんどん発展させてアンサンブルを即興的に組んでいく…。わずか 3 時間ほどで、即興音楽に触れたことのない子供たちが、笑顔で音楽を生みだしていく姿は感動的でした。またリオの日本人学校での授業も楽しい時間でした。どちらもまた機会があればぜひ行きたいと強く思っています。

治安のことはばかりいわれる中南米ですが、人は楽しく生きるものだってことが理屈ではなく伝わってくる場所でもあり、沢山の友人も出来、私は身も心も元気になって帰国しました。様々な点でよく似ている東南アジアと南米のミュージシャンたちを将来出会わせるようなことができれば、また日本がそのハブの役目を果たせたらどんなに素晴らしいだろうと思っています。実際日本が果たせる役割があるとすれば、単に自国の文化を紹介するだけでなく、世界中で始まっているインディペンデントな動きを結びつけていくことではないでしょうか。この動きはまだとても小さなものかもしれませんが、でも将来、世界が繋がっていく上で大きな可能性があると思っています。とにかくにもまた行きたい、そしてこの出会いを次に繋げていきたい、そう考えています。

※2017年11～12月にかけての中南米ツアーは同行した樋口勇輝の手で撮影され「Otomo Yoshihide Laten America Tour Movie 1 - 22」としてコンサートやワークショップ全ての様子がyoutubeにアップされています。

Chu-Nambei Kiko (Travelogue of Latin America)

In February 2017, I posted “Please contact me if you want to invite me. I would like to give a performance jointly with local musicians...” in Facebook. Many of the responses I received were from improvisation or noise musicians from Latin America. I was surprised to learn that there was such a large number of people who love alternative music and that my music is known and respected by people on the opposite side of the earth. This time, I visited Europe and the United States as well, but I would like to focus on the Latin American countries, Argentina and Brazil, where I achieved especially significant results, in this report.

In Buenos Aires, I was welcomed by Ms. Fabiana Galante, a pianist. She helped me arrange an improvisational session with local musicians, a recording, and a lecture at a university. In addition, heavyweight guitarist Mr. Fernando Kabusacki kindly arranged a joint session with major musicians in the country, such as Santiago Vazquez, at a large hall in downtown Buenos Aires. I also was privileged to participate as a guest in the ensemble La Grande at a local club where Santiago has performed over the years. In return, I invited him to the “Ensembles Tokyo” music festival that I oversee in Japan in late August 2018, which was like a Japanese version of La Grande.

Brazil boasts a wealth of music, and new forms of improvisational performances are growing while being influenced by our music. That is what I felt there. I was welcomed by improvisational performers from many parts of the nation, such as bassist Mr. Felipe Zenicola in Rio de Janeiro, and in line with my visits, a number of festivals, recording, and workshops were organized in various places in Brazil. I was able to do some recording with Mr. Arto Lindsey, a big-name musician who lives in Rio. It became one of my gratifying results.

Nothing was more wonderful than the workshop with Ação Social Pela Musica, a group of approximately 100 children (aged 6 to 18) who study classical music in a favela (slum) in Rio. They practice classical music in principle, but some children play samba percussion instruments, which are unique to Brazil. Children who are constantly exposed to the risk of crime get in touch with society through music so that they may not veer off the right path. Ação Social

Pela Musica is run on the foundation of such thoughts of social leaders. In my workshop, we use no musical notes. Someone starts by making a sound, then someone else acts as a conductor to keep developing it and create an ensemble improvisationally. In no more than three hours, children who had no experience in improvisational music began creating music with a smile on their faces, which truly moved me. In addition, a class that I had at a Japanese school in Rio was likewise a fun moment. Should an occasion arise, I wish, wholeheartedly, to visit both of them again.

When it comes to Latin America, people tend to speak about nothing other than public order and security, but it is a region that demonstrates to us that people must enjoy life in a visceral way. I made friends with a great many people there, and I returned home in better shape both physically and mentally. I believe that if I can, in the future, bring together musicians from Southeast Asia and South America, who have a lot in common, or if Japan can serve as a hub to meet that goal, the result would be phenomenal. The role that Japan can perform should be not only introducing its culture but also linking one independent move with another, which is beginning to occur all over the world. This movement may be a very small one at the moment, but it has great potential to connect the world down the road. At any rate, I am contemplating visiting the countries again and linking this encounter to the next one.

*My Latin American tour from November to December 2017 was video-recorded by Yuki Higuchi, who accompanied me, and all of our concerts and workshops are posted as “Otomo Yoshihide Latin America Tour Movie 1 - 22” on YouTube.



リオの日本人学校での音楽授業

How a music class is conducted at a Japanese school in Rio



photo by 中川正子

鈴木 康広

メディアアーティスト、武蔵野美術大学准教授、東京大学先端科学技術研究センター客員研究員

活動期間 2018年2月12日～3月16日

活動国 アメリカ、カンボジア、ドイツ、アイスランド

Yasuhiro Suzuki

Media Artist, Associate Professor of Musashino Art University, Visiting Research Fellow of the Research Center for Advanced Science and Technology, The University of Tokyo

Period of the activities: From February 12 to March 16, 2018

Countries visited: The United States, Cambodia, Germany and Iceland

身近なものの見方を介したミクロな文化交流

日常の何気ない事象に新たなつながりを見出し、幼少の頃から関わりをもってきたものを媒介に作品を制作してきました。誰しもが関わりのあるモチーフを介した作品が、異なる地域や文化の間でどのような触媒になるのか。活動を開始して20年ほど経ち、ようやく視野が広がってきました。

今回の活動を通して4カ国5都市を巡りました。ニューヨークでは、在ニューヨーク日本国総領事館で展示を行ったことで、来場者には予期しないかたちで作品を観てもらうことができました。日本人ならではの視点からニューヨークの日常を漫画に描いている近藤聡乃氏を訪ねて情報交換をしました。その他、2003年に展覧会に参加したMoMA PS1や、9/11 Memorial Museumを視察しました。

カンボジアでは、王立プノンペン大学で開催されたJapan-Cambodia Kizuna Festival 2018に参加し、全長6mの『空気の人』を展示しました。日常の光景が別のものに見えた瞬間を切り取る「見立て」をテーマにしたワークショップでは、学生をはじめ幅広い年代の参加者と交流。シンプルな内容ながらクメール語と日本語の構造の違いを強く意識し、イメージが人に伝わる瞬間の機微を感じました。大使館の江崎徹氏からの助言で、滞在中にクメール・ルージュによる虐殺跡地のトゥールスレン博物館へ。音声ガイドによるサイトスペシフィックな展示体験に非常に強い衝撃を受けました。



アイスランドの『空気の人』
"Aerial Being" in Iceland

ベルリンに向かう途中、人類の負の遺産ともいべき場所を巡っていることにより気づき始めました。ホロコースト記念碑やベルリンの壁の前で『空気の人』を浮かべることで、作品を媒介にその場所の空気を肌で感じました。目に見えない歴史をそこに感じ、空気を人の形に象ることについて改めて考えさせられました。ベルリンでは、ベルリン日独センターの清田とき子氏からHaus am Waldseeのブローム・ベルグ館長を紹介していただき、改装中の美術館を視察。森と湖に面したロケーションに常設された作品からドイツの作家の思想を垣間見ることができました。

レイキャビクでは、地球が剥き出しになった大自然に『空気の人』を投げ出し、アートを媒介にした自然と人間との関わりについて考えました。市立図書館と地熱プールでの個展、道端でのパフォーマンスで通り掛かりの人に頻りに声を掛けてもらい大変励みになりました。

今回の活動を通して、身近なものを介した物事の感じ方に触れるミクロな文化交流の意識が芽生えました。誰しもが関わりをもったことのあるモチーフを介した作品が、言語と現象との隙間に隠れている感性を顕在化する触媒となりうるのではないかと。見ず知らずの人と昔からの知り合いのように感じられる瞬間を海外でも見つけていける手応えを感じました。



ワークショップ Yasuhiro Suzuki "Your world from another view"
「日本カンボジア絆フェスティバル 2018」CJCC (プノンペン、カンボジア)
Workshop titled Yasuhiro Suzuki "Your world from another view"
Japan-Cambodia Kizuna Festival 2018, CJCC (Phnom Penh, Cambodia)

Micro–Cultural Exchange through Familiar Viewpoints

To date, I have created works by finding new linkages in casual phenomena seen in daily life and by using things with which I have been associated since I was a child as a medium. How would my works, in which items familiar to anyone are used as motifs, serve as a catalyst between different regions or cultures? It has been about 20 years since I started my activities; my horizons have finally begun broadening.

Through this cultural envoy activity, I traveled to five cities in four countries. In New York, I exhibited my works at the Japanese Consulate General, thereby allowing visitors to view them in an unexpected venue. I visited Ms. Akino Kondoh, who produces a comic strip about daily life in New York from a perspective unique to a Japanese citizen, and exchanged information. Besides these, I visited the MoMA PS1, where I had participated in an exhibition in 2003, and the 9/11 Memorial Museum as well.

In Cambodia, I took part in the Japan-Cambodia Kizuna Festival 2018, which was organized at Royal University of Phnom Penh, and exhibited a six-meter-long work entitled *"Aerial Being."* At a workshop on the subject of "mitate (resembling)" whereby the moment when you perceive an ordinary every-day scene as something different is cut out, I interacted with people of all ages, including students. Despite its simple content, I was strongly aware of the difference in the structures of Khmer and Japanese and felt the finer points of the moment people grasped the essence of an image. On the advice of Mr. Toru Ezaki of



『空気の人』ゲイシール間欠泉にて (アイスランド)
"Aerial Being" at Geysir (Iceland)



『空気の人』鈴木康広展 "A Journey around the Neighborhood Globe"
レイキャビク市立図書館 (レイキャビク, アイスランド)
"Aerial Being" at Yasuhiro Suzuki's Exhibition "A Journey around the Neighborhood Globe" Reykjavik Municipal Library (Reykjavik, Iceland)

the Japanese Embassy, I visited the Tuol Sleng Genocide Museum, the memorial site of the S-21 interrogation and detention center of the Khmer Rouge regime, during my stay. I was profoundly moved by a site-specific exhibition experienced through an audio guide.

On the way to Berlin, I finally began to realize that I was touring some places that can justifiably be characterized as mankind's negative legacy. By exhibiting *"Aerial Being"* in front of the Memorial to the Murdered Jews of Europe and the Berlin Wall, I felt the atmosphere of the site tangibly through the medium of my creation. I felt an invisible history there, which made me think about turning air into the shape of a human again. In Berlin, Ms. Tokiko Kiyota of the Japanese-German Center Berlin introduced me to Dr. Katja Blomberg, Director of Haus am Waldsee, who kindly gave me the opportunity to visit the museum that was undergoing renovation. From the works on permanent exhibit in a location that faces a forest and a lake, I was able to get a glimpse of the philosophy of German authors'.

In Reykjavik, I threw *"Aerial Being"* into the greatness of nature where the earth was newly formed and pondered the relationship between nature and humans using art as a medium. During the one-man exhibitions that I held at the municipal library and the geothermal pool or performances that I gave on the streets, passers-by frequently stopped to talk to me, which was extremely encouraging.

This cultural envoy activity led to an awareness of how micro–cultural exchange enables you to feel things anew through items familiar to you. Works with the theme of using things that are familiar to anyone can become a catalyst for bringing sensibilities hidden in the gap between language and phenomena to the surface. I sensed a good response that fuels me to keep pursuing the moment that I can feel as if a complete stranger were a longtime acquaintance even outside of my own country.



種田 道一

金剛流能楽師

活動期間 2018年1月20日～3月15日

活動国 アメリカ、フランス、スペイン、イタリア、ハンガリー

Michikazu Taneda

Kongoh School Noh Actor

Period of the activities: From January 20 to March 15, 2018

Countries visited: The United States, France, Spain, Italy and Hungary

能・SILENCIO（静寂）



ヴェネツィア大学ワークショップ
A workshop at the University of Venice

西洋の古典芸能が「人間性の追求」であるのに対し、日本のそれは「癒し」の芸術であると言われています。

しかし本当の「なぐさみ」は優れた芸術によってのみなされるものです。600年以上絶えず演じられ、ユネスコの無形文化遺産として最初に登録された能、同じ中世に成立した茶道、香道とを関連させ同じく古い歴史をもつ国の人々にその魅力を伝えることができればと考えました。パリ日本文化会館で茶会、聞香の会を催しそれぞれの趣向にちなんだ謡を手前中にうたいました。これは常の会ではないことで音の無い手前に更に静粛感を与えることになったと思います。

日本からは能面を2面、能装束の長絹、髪、髪帯、蜘蛛の糸またワークショップの為に扇を25本持ってまいりました。

今までの海外公演は能のかたちで総勢20名を超えるものでした。今回は一人で出来るもの、さらに一人でしか出来ない内容

を考えました。

1時間から1時間半の公演ではまず最初に有名な『高砂』の小謡にローマ字表記を付け加え、全員で合唱することで皆の心を一つにすることから始めました。能を神・男・女・狂・鬼に分け代表曲を一番ずつ仕舞で披露いたしました。その曲間には感情を表現する型と所作を実演し、面装束を観客に着けてもらうこともしました。最後の鬼の曲『土蜘蛛』で蜘蛛の巣を撒くのは大そう好評でした。

ワークショップでは全員に扇を持ってもらい短い仕舞の稽古をし、3、4日の練習で成果発表会をしましたが、参加者が演劇関係者や日本文化を学んでいる学生達だけに素晴らしい結果を得ることができました。

最終地のブダペストの映画・演劇学校ではワークショップの日数や時間が十分とれたことや、大学側が事前に専門家による能楽概説の講義をもたれていたことで学生の関心がとても深まっていたように思います。最後の稽古の後、私へのお礼として学生が学んだばかりだというハンガリーの民族舞踊を披露してくれたのはとても感動いたしました。私の使命である文化の交流ができた実感された瞬間でした。

今回31回の活動を終え、多くの国での能に対する印象が共通してSILENCIO（静寂）ということに驚き、また正しく能を伝え理解して頂けたと確かな手応えを感じることができました。



パリ日本文化会館公演「土蜘蛛」
The performance of "Tsuchigumo" at Maison de la culture du Japon à Paris

Noh SILENCIO (Silence)



パリ公演内での観客による体験
The audience gets a hands-on experience in our performance in Paris.

Whereas traditional performing arts in the West are in “pursuit of humanity,” the counterparts in Japan are said to provide “healing.”

Having said that, however, I believe that true “amusement” can only be gained through excellent art. I thought that it would be great if I could convey, to people in various countries that have as long a history as Japan, the appeal of Noh, which has been continuously performed in Japan for more than 600 years and was the first Masterpiece of the Intangible Cultural Heritage of Humanity recognized by UNESCO, along with the tea ceremony and incense burning, both of which were established during the same medieval times in Japan. We held a tea ceremony and a meeting to enjoy the fragrance of incense at Maison de la culture du Japon à Paris and sang ballads suited to the aesthetics of the respective ceremonies or meetings. Although not performed in an ordinary tea ceremony, I believe that these activities further highlighted the sense of silence of the soundless tea ceremony.

From Japan, I brought two Noh masks, the Noh costume *choken* (long silk) , Noh wigs, wig bands, spider silk, and 25 fans for the workshop.

Our previous Noh performances overseas included a total of more than 20 members. This time, I considered performances that can be put on by a single person or that can only be achieved by a single person.

In one-hour- to 90-min-long performances, at the outset, all the performers sang the famous “*Takasago*,” a short Noh-comedy chant, with the lyrics provided in Roman characters,

thereby uniting the hearts of all. We performed leading Noh plays in *shimai* (a short section of the Noh play) one by one by dividing the Noh play into gods, men, women, maniacs, and ogres. Between plays, we demonstrated the styles and stage tasks for expressing emotions and invited the audience to wear the masks and costumes as well. In the final scene of an ogre act entitled “*Tsuchigumo* (the demon spider)” , the scattering of spider silk was extremely well received.

In the workshop, all the participants held a fan and practiced a short version of *shimai* and presented the results after three or four days of practice. In particular, because the participants were persons involved in theatrical entertainment or students in studying Japanese culture, we were able to produce a wonderful result.

At a film and drama school at our final destination, Budapest, owing, in part, to the fact that we secured an adequate number of days and time and also because the university provides a course on a general account of Noh by an expert, students’ interest appeared to have deepened to a great degree. After the final practice, as a token of appreciation to me, students performed a Hungarian ethnic dance they had just learned, which moved me immensely. It was a moment when I felt tangibly that I had been able to realize cultural exchange, which was my mission.

During the total of 31 stints of various activities, I was surprised by the fact that the impression of Noh common to a number of countries was SILENCIO (silence) . By the end of the tour, I was happy to realize that we could feel that we had conveyed Noh correctly and had enabled the audience to understand Noh.



ブダペスト国立映画・演劇大学発表会
Presentation at the University of Theatre and Film Arts (Budapest)



本條 秀慈郎

三味線演奏家

活動期間 2018年3月12日～6月29日, 9月2日～10月17日

活動国 トルコ, アメリカ, イタリア, フランス, イギリス, ドイツ, チェコ, ロシア

Hidejro Honjoh

Shamisen Player

Period of the activities: From March 12 to June 29 and from September 2 to October 17, 2018

Countries visited: Turkey, the United States, Italy, France, the United Kingdom, Germany, Czech Republic and Russia

三味線が外国で説明されるとき



トルコ・アンカラの伝統音楽の演奏家と共演後のひと時。

After performing with the players of traditional musical instruments in Ankara, Turkey.

Japanese Banjo のように説明されることがある。しかしながらこの楽器の持つその特有の“物事の質感”でさえ表現し、同時に現代の趣にとっても共鳴していることを感じると、それをより深く伝えることのできる“表し方”があるのではないかと、今もそれを探し続けている。

今回の“旅”は新たな時代を予感するものであると同時に想像を絶する過酷なものでもあった。

私はただ三味線を紹介するだけというような内容や、自分のレパートリーに頼ることをこの旅の中で避けた。世界には現代音楽を生業とするアンサンブルがいくつか存在しており、彼らを頼りに現代作曲家の新作に互いに取り組めるような旅をしようと心に決めていた。

まずはじめだけは楽器のルーツは辿りたいと思い、その一つが存在するイスタンブール、アンカラへと訪れた。“メイ”や“サズ”といった楽器の演奏家と語る。三味線の多様なチューニングによく似た音の配列が、トルコの楽器にはいくつも存在した。地域によって音楽が異なる部分など

共通するものがある。

パリでアンサンブル・アンテルコンタンポランのメンバーとの共演。彼らは有難いことに三味線とのコラボという意識を直ぐに通り越してくれた。しかしあのブーレーズに組織された繊細であり、ソリストティックで魔法の様な彼らの力に圧倒されてしまった。彼らの中に三味線の音は響いたのだろうか。

ロシアはクラスノヤルスクで三味線協奏曲を初演。シベリア中央に位置する地、周辺には少数民族が沢山存在し、その声を拾いながらオーケストラを先導していくというコンセプトの作品。大きな衝撃を受けた。自分自身の足りない力は民族的なものの中に存在している。

ニューヨークジャパンソサエティの主催で師のコンサート“三味線の古典から現代”と、その後インターナショナル・コンテンポラリー・アンサンブルとの共演で“三味線の現代から未来”をコンセプトとした企画を連続して開催して頂いた。

ラストはドイツフランクフルトでアンサンブル・モデルンとの共演。彼らの演奏に対する並々な知性、胆力、真摯な姿勢に脱帽した。彼らが行なっている教育を含め、様々なことに対するドイツ政府の協力的な気質や体制が1つの大きな力になっていると感じた。日本とヨーロッパに違いはあるが四季の中で我々の自然に対する共通した感謝の思いや、平和への願いをテーマに即興演奏したりもした。

三味線そして現代音楽、離れているようで1番近い世界。今回大きな旗と共にその視野を広げ私の身体に強力な“実体験”を刻ませて頂いた。

これからはその衝撃を超えて歴史の中で、次世代に繋がるものがすこしでも残せればと、絶えず精進したい。すべてに感謝。

When “*Shamisen*” is Described in Another Language

Shamisen is sometimes referred to as a “Japanese banjo.” However, considering its capability in expressing even the subtlest “texture of things” in a strikingly contemporary way, I have always thought that there should be a better definition for it, and am still searching for one.

The “journey” I took this time (as a Japan Cultural Envoy) impressed me with the excitement that a new era of music is arriving, but at the same time it was physically and mentally demanding, beyond my imagination.

My idea for this trip was not to merely introduce the shamisen as a musical instrument, nor to perform only from my existing repertoire. I knew of a couple of musical ensembles dedicated to contemporary music, so I decided to take this opportunity to collaborate with them, and jointly perform new works composed by contemporary composers.

To learn more about the origin of the lute family, I first visited Istanbul and Ankara, where such instruments are commonly found, and had discussions with local players of “mey (double-reed aerophone)” and “saz (Turkish long neck lute).” I discovered many instruments in Turkey with a variety of musical scales resembling that of the shamisen. I also found commonalities that we share, such as regional variance in local music.

In Paris, I performed with the Ensemble intercontemporain. Fortunately, they immediately dropped the idea of “just playing together with shamisen” and brought the session to a new level. In fact, I was overwhelmed by the sensitive and magical soloistic performances of the members of this group,



パリにてアンサンブル・アンテルコンタンポランとのリハーサル。パリ日本文化会館にて
A rehearsal with the members of the Ensemble InterContemporain at the Maison de la culture du Japon à Paris

which was organized by Pierre Boulez. I wonder whether the sound of the shamisen reached their hearts.

For the first time, I performed a shamisen concerto in Krasnoyarsk, Russia. This piece was based on the concept of shamisen soloist as a leader and the orchestra traveling through Central Siberia, mingling with many indigenous peoples who live there, and the music impacted me greatly. I realized that the power I am falling short of derives from a lack of connection with my ethnicity.

In New York, the Japan Society organized two consecutive shamisen performances: One by my teacher Hidetaro Honjoh, themed around “classic and contemporary works for shamisen,” and another by me and the International Contemporary Ensemble playing contemporary and futuristic works for shamisen.

In the last part of the trip, I performed with the Ensemble Modern in Frankfurt, Germany. I salute them for their remarkable intelligence, boldness, and sincerity toward performance. It was also impressive to see how supportive the German government was in all aspects of the performing arts, including music education provided by the Ensemble Modern. The Ensemble Modern and I also improvised music together to express our gratitude toward the four seasons that Japan and Europe share, although our perceptions may be different. Prayer for peace was another theme we chose for our improvisational session.

The worlds of shamisen and contemporary music – they seem far apart, yet they are very close. This trip, which was organized for the great mission of serving as a Japan Cultural Envoy, broadened my view and left a strong impression on me, body and soul.

Digesting the impact, I’d like to devote myself to creating works that I can pass on to the next generation. I am grateful for every experience this trip has given me.



ニューヨーク・ジャパソサエティ主催公演。ニューヨークタイムスに取り上げられる。
A performance sponsored by the Japan Society in New York that was featured in The New York Times.



増田 セバスチャン

アートディレクター、アーティスト

活動期間 2017年9月21日～10月17日, 11月1日～12月19日, 2018年1月2日～2月24日, 3月3日～4月1日
活動国 オランダ, 南アフリカ, アンゴラ, アメリカ, ボリビア, ブラジル

Sebastian Masuda

Art Director & Artist

Period of the activities: From September 21 to October 17 and from November 1 to December 19, 2017,
From January 2 to February 24 and from March 3 to April 1, 2018

Countries visited: The Netherlands, South Africa, Angola, the United States, Bolivia and Brazil

「KAWAII」という言葉で、世界をひとつにできるか？



ボリビアのワークショップに集まった KAWAII 文化のフォロワーたち
Followers of KAWAII culture who gathered at a workshop in Bolivia

日本のポップカルチャーのムーブメントが世界で急速的に広がっているという事実は、日本国内にいるとなかなか実感できないものです。

今回、この文化交流使の機会をいただいて、僕の作品のコンテキストである「KAWAII」が、世界でどのように広がり、どのように支持されているのかを実際にこの目で確認するというのが目的のひとつでした。

そこで、2014年より世界中で取り組んでいる「タイム・アフター・タイム・カプセル」というアートプロジェクトを、訪問国各都市で実施することにしました。

これは、各都市の美術館などにハローキティやテディベアなどのキャラクター型の透明なタイムカプセルを設置し、ワークショップを開催して未来へのメッセージを書いてもらい、それを可愛くデコレーションして、カプセルに納入してもらう…という参加型の作品です。

カワイイという言葉に惹かれてそこに集まる人びとや、タイムカプセルの中に入れられたカワイイものや未来へのメッセージ。

それらはすべて「希望」という言葉に置き換えられ、今

という時代の空気感ごと、アーカイブしてしまうことで、時代に対する閉塞感や人種・宗教・性別・国境などの様々なボーダーを乗り越えてしまおうというのがこの作品の大きな主旨です。

その後、タイムカプセルは、一旦2020年のオリンピックイヤーに世界各地から東京に送られ、縦に大きく積み上げて、大きな「KAWAII」モニュメントとして制作していきます。

交流使としての訪問国（オランダ、アメリカ、南アフリカ、アンゴラ、ボリビア、ブラジル）では、「KAWAII」についてのレクチャーとタイムカプセルの手紙のワークショップを実施しました。

アフリカのアンゴラでは、日本という国への関心が少ないと聞いていましたが、実際現地を訪ねれば、そんなことは全然なく、むしろ多くの日本の知識と興味を持って参加してくれました。南米のボリビアでは、近隣のペルーやチリなどの国からも駆けつける参加者がいたり、南米らしい熱を持ったイベントになりました。

ブラジル・サンパウロでは、会場であるジャパン・ハウスのイベントの中でも、過去もっとも多い参加者が集まり、訪問国最大のイベントになりました。

どの国も熱狂的に迎え入れられるさまをこうやって体験すると、日本のポップカルチャーの影響力の大きさを感じずにはられません。

「KAWAII」。それは、決して表面的な可愛さや派手さのことだけを指す言葉ではなく、内包する発想の自由さやクリエイティビティ、そして、「KAWAII」という言葉を心に持つことで得られる、誰にも何事にも縛られない自由さ、力強さを表す言葉です。

「KAWAII」は、もはや日本が生み出した、若い世代になくはならない、彼らだけの特別な「概念」や「哲学」にまで昇華しているということを、体感した旅でした。

Can You Unite the World with the Single Word “KAWAII” ?



ブラジルでの TIME AFTER TIME CAPSULE にて手紙を入れる様子
People put their letters in the TIME AFTER TIME CAPSULE in Brazil.

When you live in Japan, it is difficult to feel tangibly the fact that Japanese pop culture movements have been expanding at a fast pace globally. This time, as I was given the opportunity to serve as a Japan Cultural Envoy, one of my objectives was to see, with my own eyes, how the context of my work, i.e., the use of the word “KAWAII,” has expanded and garnered support throughout the world.

Against this background, I decided to organize an art project, called the “TIME AFTER TIME CAPSULE,” that I have been working on in many parts of the world since 2014, in the cities that I visited during this tour. This is a participatory project in which we set up a transparent time capsule shaped like characters such as Hello Kitty or a teddy bear, in a museum or other facility in each city. We organize a workshop where people write messages for the future, decorate them in a cute fashion, and store them in the capsule.

The people gather, attracted by the word “KAWAII,” and “KAWAII” things and their messages for the future are put in the capsule; all these can be manifestations of the sense of “hope.” By archiving these items along with the atmosphere of the current age, this piece of art is aimed at overcoming the sense of stagnation, as well as the wide array of boundaries, such as race, religion, gender, and national borders.

Later, these time capsules will be sent to Tokyo from various parts of the world in 2020 when the Summer Olympic and Paralympic Games will be held, where they will be assembled into a huge “KAWAII” monument.

In each of the countries that I visited as a Japan Cultural Envoy, namely, the Netherlands, the United States, South Africa, Angola, Bolivia, and Brazil, I gave a lecture on the concept of “KAWAII” and organized a workshop for storing letters in a time capsule.

Although I had heard that people had little interest in Japan in Angola, Africa, once I visited the country, I found that was not the case at all, and a great many people who had a wealth of knowledge of and interest in Japan participated in the project. In Bolivia in South America, we had participants who came all the way from neighboring countries, such as Peru and Chile, making the event a passionate one typical of Latin America.

In Sao Paolo, Brazil, we drew the largest ever number of participants for an event held at the venue, Japan House, making it the biggest-scale event even among all the countries that I visited.

After having experienced an enthusiastic welcome in each country, I cannot help but feel the great influence that Japanese pop culture has on other parts of the world.

“KAWAII” is not only a word that describes superficial cuteness or gaudiness but also one that represents out-of-the-box thinking and creativity, encompassing a freedom and strength that are not bound by anybody or anything and that can be gained by keeping the word “KAWAII” in one’s mind.

This tour was a journey in which I realized that “KAWAII” has already been sublimated into a special “concept” or “philosophy” that was generated in Japan and has become essential to the younger generations.



アラスカのアンカレッジミュージアムでのワークショップ
A workshop at the Anchorage Museum in Alaska

「文化交流使」には5つのカテゴリーがあります。

1. 長期派遣型
- 日本在住の芸術家、文化人等が諸外国に一定期間（1か月～12か月）滞在し、それぞれの専門分野で講演、講習や実演、デモンストレーション等を行います。（平成27年度～）
2. 海外派遣型
- 日本在住の芸術家、文化人等が諸外国に一定期間（1か月～12か月）滞在し、それぞれの専門分野で講演、講習や実演、デモンストレーション等を行いました。（平成15年度～平成26年度実施）
3. 短期指名型
- 国際芸術交流支援事業により海外で公演等を行う芸術団体等が、現地の学校等で実演会、演奏会等を行い、日本文化の普及活動を行いました。（平成20年度～平成25年度実施）
4. 現地滞在者型
- 海外在住の芸術家、文化人がその滞在国内で、それぞれの専門分野で講演、講習や実演デモンストレーション等を行いました。（平成15年度～平成21年度実施）
5. 来日芸術家型
- 公演等で来日する諸外国の著名な芸術家、文化人が、日本滞在期間を利用して学校等を訪問し、実演、講演等を行いました。（平成15年度～平成19年度実施）

平成15年度（2003年）○派遣順＊印は、次年度も引き続き活動

〈海外派遣型 ―― 12名〉

氏 名	プロフィール	活動国	活動期間
三浦 尚之 ^{なおゆき}	音楽プロデューサー	アメリカ	平成15年7月20日～9月1日
渡辺 洋一	和太鼓奏者	アメリカ	平成15年8月15日～9月6日
田中 千世子	映画評論家	ヨルダン、スロバキア、アイスランド、ハンガリー	平成15年8月15日～12月9日
小山内 美江子 ^{おさない}	脚本家	カンボジア	平成15年8月20日～9月24日
梅林 茂	作曲家	イタリア	平成15年8月27日～11月8日
国本 武春 [*]	浪曲師	アメリカ	平成15年9月12日～平成16年8月10日
パロン吉元	漫画家	スウェーデン	平成15年9月22日～11月21日
三谷 温 ^{おん} [*]	ピアニスト	クロアチア	平成15年9月27日～平成16年5月14日
笑福亭 鶴笑 ^{おくしゅう} [*]	落語家	タイ、イギリス	平成15年12月1日～平成16年1月15日、平成16年3月30日～平成17年3月29日
小宮 孝泰 [*]	俳優	イギリス	平成16年1月16日～5月11日
平野 啓一郎 [*]	作家	フランス	平成16年2月28日～平成17年2月27日
四方田 犬彦 ^{よもた} [*]	映画評論家	イスラエル、セルビアモンテネグロ	平成16年3月15日～12月20日

〈現地滞在者型 ―― 4名〉

氏 名	プロフィール	活動国	活動期間
高岡 美知子 [*]	答礼人形研究家	アメリカ	平成16年3月1日～平成17年2月28日
松本 直み ^{なお} [*]	舞台照明研究家	フィリピン	平成16年3月1日～平成17年2月28日
ラーシュ・ヴァリエ [*]	詩人、スウェーデン議会国際課長	スウェーデン	平成16年3月1日～平成17年2月28日
ローチャン由理子 [*]	画家	インド	平成16年3月1日～平成17年2月28日

〈来日芸術家型 ―― 5組〉

氏 名／団体名	プロフィール	在住国	活動期間	活動場所
ソレダット	タンゴ・クインテット	ベルギー	平成15年10月15日	代々木高等学院
ケント・ナガノ	指揮者	アメリカ	平成15年10月30日	品川区立立会小学校
ルノー・カブソン	ヴァイオリニスト	フランス	平成16年1月7日	東村山老人ホーム
クリスティアン・アルミンク	新日本フィルハーモニー交響楽団音楽監督	オーストリア	平成16年1月14日	墨田区立両国中学校
ディビット・バイヤット	ホルン奏者	イギリス	平成16年3月15日	福岡市立舞鶴中学校

平成16年度（2004年）○派遣順＊印は、次年度も引き続き活動

〈海外派遣型 ―― 5名〉

氏 名	プロフィール	活動国	活動期間
北村 昭斎 ^{しょうさい}	重要無形文化財「螺鈿」(各個認定)保持者	ドイツ	平成16年6月2日～7月10日
杉本 洋 ^{ひろし}	日本画家	カナダ	平成16年9月1日～11月30日
橋口 譲二 [*]	写真家	ドイツ	平成16年12月13日～平成17年12月12日
井上 廣子 ^{ひろこ} [*]	造形作家	オーストリア	平成17年1月10日～平成18年1月9日

宮田 まゆみ	笙演奏家	ギリシャ, イタリア, フランス, ドイツ, ルクセンブルク	平成17年2月1日～2月28日
--------	------	--------------------------------	-----------------

〈来日芸術家型 ―― 5組〉

氏 名／団体名	プロフィール	在住国	活動期間	活動場所
イシュトヴァーン・コロッシェ	オルガニスト	ハンガリー	平成16年6月12日	桜美林大学
エムバイヤ・プラス	金管五重奏	アメリカ	平成16年6月14日	神戸市立港島小学校
フランソワ・ルルー	オーボエ奏者	フランス	平成16年10月5日	長崎市立山里小学校
カール・ライスター	クラリネット奏者	ドイツ	平成16年10月19日	名古屋市立見付小学校
デニス・マトヴィエンコ	バレエダンサー	ウクライナ	平成17年3月3日	品川女子学院高等部

平成17年度（2005年）○派遣順 *印は、次年度も引き続き活動

〈海外派遣型 ―― 5名〉

氏 名	プロフィール	活動国	活動期間
河村 晴久	能楽師	アメリカ	平成17年4月14日～5月25日
村井 健 ^{けん}	演劇評論家	ロシア	平成17年5月3日～6月9日
神田 山陽 ^{さんよう} *	講談師	イタリア	平成17年9月1日～平成18年8月31日
平田 オリザ	劇作家, 演出家	カナダ, アメリカ	平成18年1月3日～3月31日
Ikuo 三橋 ^{みつはし} *	演出家	フランス, ベルギー, モロッコ, マダガスカル, フィンランド, ブラジル	平成18年1月15日～12月14日

〈現地滞在者型 ―― 2名〉

氏 名	プロフィール	活動国	活動期間
杉 葉子	女優	アメリカ	平成17年5月2日～10月31日
ほんな 本名 徹次*	指揮者	ベトナム	平成17年11月17日～平成18年11月16日

〈来日芸術家型 ―― 6組〉

氏 名／団体名	プロフィール	在住国	活動期間	活動場所
オクトバス4	コントラバス四重奏	イタリア	平成17年6月15日	東京国際学園高等部
アンヘル・コレーラ	バレエダンサー	スペイン	平成17年7月24日	六本木ヒルズ
ソレダッド	タンゴ・クインテット	ベルギー	平成17年7月25日	愛知県立明和高等学校
10人のミラクル・トランペッター TEN OF THE BEST	トランペット・アンサンブル	ドイツ	平成17年12月11日	秋田県立勝平養護学校
ラルス・フォークト	ピアニスト	ドイツ	平成18年2月6日	東京都立芝商業高等学校
日豪ジャズオーケストラ参加 オーストラリア・ミュージシャン	ジャズオーケストラ	オーストラリア	平成18年3月20日	広島県立尾道北高等学校

平成18年度（2006年）○派遣順 *印は、次年度も引き続き活動

〈海外派遣型 ―― 9名〉

氏 名	プロフィール	活動国	活動期間
寺内 直子	神戸大学教授 日本の宮廷音楽・雅楽の研究及び演奏	アメリカ	平成18年8月28日～平成19年3月30日
源田 悦夫	九州大学教授メディア芸術・情報デザイン	中国, 韓国	平成18年8月31日～10月25日
川井 春香 ^{しゅんこう}	華道家	スウェーデン, スペイン, イタリア, フランス	平成18年9月12日～12月15日
勝美 巴湖 ^{ともこ} *	日本舞踊家	イギリス	平成18年12月26日～平成19年7月15日
坂手 洋二*	劇作家, 演出家	アメリカ, フランス, ドイツ	平成19年2月5日～4月13日
桂 小春團治 ^{こはるだん じ}	落語家	アメリカ	平成19年2月6日～3月10日

とよざわ 豊澤 富助	人形浄瑠璃文楽	イギリス, ドイツ, スイス, イタリア	平成19年2月26日～3月28日
てらふみ 寺井 栄*	能楽師（能楽観世流シテ方）	オーストラリア	平成19年3月5日～5月30日
ちず 小林 千寿*	囲碁棋士	オーストリア, スイス, ドイツ, イギリス, フランス, ブルガリア, チェコ	平成19年3月14日～平成20年3月13日

〈現地滞在者型 ―― 1名〉

氏 名／団体名	プロフィール	活動国	活動期間
こうせん 大坪 光泉*	華道家	中国	平成18年9月15日～平成19年9月14日

〈来日芸術家型 ―― 9組〉

氏 名／団体名	プロフィール	在住国	活動期間	活動場所
アドリエル・ゴメス・マンスール	ピアニスト	アルゼンチン	平成18年4月24日	大分県日出町立日出小学校
オクトバス4	コントラバス四重奏	イタリア	平成18年6月20日	NPO楠の木学園（横浜）
ジョン・ナカマツ	ピアニスト	アメリカ	平成18年7月10日, 11日	新潟県立新潟盲学校, 新潟県立上越養護学校
ペーター・シュミードル	クラリネット奏者	オーストリア	平成18年7月14日	北海道立真駒内養護学校
エミリー・バイノン	フルート奏者	オランダ	平成18年7月22日	上甕老人福祉センター
ヴォルフガング・シュルツ	フルート奏者	オーストリア	平成18年8月26日	草津町立草津中学校
オーブリー・メロー	舞台演出家, オーストラリア国立演劇学校校長	オーストラリア	平成18年9月28日	東京都立富士高等学校
ツェンド・バット・チョローン	モンゴル国立馬頭琴交響楽団芸術監督・指揮者	モンゴル	平成18年10月13日, 20日	相模原市立若松小学校, 板橋区立志村第四小学校
フ란ツ・リスト室内管弦楽団	管弦楽団	ハンガリー	平成19年1月18日	北海道帯広養護学校

平成19年度（2007年）○派遣順 *印は、次年度も引き続き活動

〈海外派遣型 ―― 9名〉

氏 名	プロフィール	活動国	活動期間
わへい 立松 和平	作家	中国	平成19年4月27日～5月26日
ゆうけい 三浦 友馨	華道家	中国	平成19年8月1日～9月28日
な か ほくおん 名嘉 睦稔	画家	韓国, フランス, スペイン	平成19年8月30日～11月13日
本間 博*	将棋棋士	フランス, イギリス, ドイツ, スペイン, モナコ	平成19年8月30日～平成20年5月29日
なすむ 中村 享	盆栽作家	カナダ	平成19年9月5日～10月6日
円田 秀樹*	囲碁棋士	ブラジル, チリ, アルゼンチン, メキシコ, コロンビア, エクアドル, ベネズエラ, コスタリカ, ペルー, ウルグアイ, マダガスカル, 南アフリカ	平成19年10月2日～平成20年7月1日
あずま 湯山 東	画家	フランス, チェコ, ドイツ	平成19年11月2日～12月19日
し 桂 かい枝*	落語家	アメリカ	平成20年3月31日～10月1日
う ん ん 橘 右門*	寄席文字書家	イギリス, ドイツ, ハンガリー	平成20年3月31日～平成21年2月16日

〈来日芸術家型 ―― 7組〉

氏名／団体名	プロフィール	在住国	活動期間	活動場所
セルゲイ・ナカリャコフ	トランペット奏者	フランス	平成19年4月17日	大分県日田市立桂林小学校
ファジル・サイ	ピアニスト	トルコ	平成19年7月11日	渋谷区立小学校
イアン・パウスフィールド	トロンボーン奏者	イギリス	平成19年7月14日	札幌市立札幌小学校
チェコ少年少女合唱団	合唱団	チェコ	平成19年7月30日	北九州市立穴生中学校
アントニー・シビリ	ピアニスト	アメリカ	平成19年8月23日	群馬県立西邑楽高等学校
イングリット・フリッター	ピアニスト	イタリア	平成19年9月29日	滝乃川学園一橋大学
ニコラ・ルー・ツェヴィチ	チェロ奏者	クロアチア	平成20年3月18日, 19日	北海道音更高校中札内文化創造センター

平成20年度（2008年） ○派遣順 *印は、次年度も引き続き活動

〈海外派遣型 ― 8名〉

氏 名	プロフィール	活動国	活動期間
島田 雅彦	作家	アメリカ, 韓国	平成20年7月1日～平成21年3月31日
千 宗屋*	茶道家	アメリカ, フランス, イタリア, ドイツ, メキシコ, ベルギー	平成20年7月31日～平成21年6月30日
梅若 猶彦	能楽師（シテ方）, 静岡文化芸術大学教授	フィリピン	平成20年8月2日～9月8日
小林 千寿	囲碁棋士	フランス, オーストリア, ドイツ, イギリス	平成20年8月27日～平成21年3月26日
中川 衛	重要無形文化財「彫金」（各個認定）保持者	アメリカ	平成20年9月8日～10月20日
常磐津 文字兵衛	常磐津三味線奏者, 作曲家	韓国	平成20年9月27日～10月27日
福田 栄香（千栄子改め）	地歌箏曲演奏家	フィリピン, インドネシア, マレーシア	平成21年2月17日～3月16日
須田 賢司*	木工芸作家	ニュージーランド	平成21年3月22日～5月4日

〈現地滞在者型 ― 2名〉

氏 名	プロフィール	活動国	活動期間
上野 宏秀山*	尺八奏者	シンガポール	平成21年2月1日～4月30日
ブーイ 文子*	茶道家	タイ, インド	平成21年2月1日～4月30日

〈短期指名型 ― 5組〉

団体名	分野	在住国	活動期間	備考
財団法人日本伝統文化振興財団 狂言		インドネシア	平成20年9月3日, 5日	山本東次郎家, 狂言公演
舞踊集団菊の会	舞踊（邦舞）	ブラジル	平成20年9月16日, 25日	
太神楽曲芸協会	太神楽曲芸	カンボジア	平成20年12月3日	
鬼太鼓座	和太鼓	ブラジル	平成20年12月16日	
大歌舞伎「NINAGAWA十二夜」 ロンドン公演実行委員会	歌舞伎	イギリス	平成21年3月26日	

平成21年度（2009年） ○派遣順

〈海外派遣型 ― 10名〉

氏 名	プロフィール	活動国	活動期間
有野 芳人	将棋棋士	中国	平成21年5月27日～8月9日
青木 紳一	囲碁棋士	オランダ, オーストリア, ドイツ, スロバキア	平成21年7月24日～12月27日
喜瀬 慎仁	三線奏者	フィリピン, 中国, フランス, ドイツ, イギリス	平成21年8月1日～平成22年1月31日
鶴賀 若狭掾	重要無形文化財「新内節浄瑠璃」（各個認定）保持者	イギリス, アイルランド, オランダ, ベルギー	平成21年9月14日～10月29日
竹本 千歳大夫	人形浄瑠璃文楽	チェコ, ドイツ, オーストリア	平成21年9月24日～10月24日
蜂谷 宗苴	香道家元後継者	フランス, 中国, イタリア, ドイツ, アメリカ, ルクセンブルク, フィンランド	平成21年9月30日～平成22年3月24日
武関 翠瑠	竹工芸家	ドイツ	平成21年10月11日～11月17日
伊部 京子	和紙造形家	アメリカ, エジプト	平成21年11月3日～平成22年3月3日
久保 修	切り絵画家	アメリカ	平成21年12月30日～平成22年3月26日
三橋 貴風	尺八演奏家	韓国, ブラジル	平成22年2月5日～3月23日

〈現地滞在者型 ― 1名〉

氏 名	プロフィール	活動国	活動期間
澤崎 琢磨	和太鼓奏者	パラグアイ, ブラジル	平成21年8月1日～10月31日

〈短期指名型 ― 5組〉

団体名	分野	活動国	活動期間	備考
NPO法人和文化交流普及協会	伝統芸能（獅子舞, 津軽三味線, 和太鼓等）	ウルグアイ	平成21年9月7日, 8日	
猿楽會	狂言	オーストリア	平成21年10月13日	
社団法人落語芸術協会	落語	カンボジア	平成21年11月25日	
株式会社オフィスK2	和太鼓	ウズベキスタン	平成22年1月23日, 24日, 26日	和太鼓「婢弥鼓」
ミュージック・フロム・ジャパン 推進実行委員会	雅楽	アメリカ	平成22年2月22日	

平成22年度（2010年） ○派遣順 *印は、次年度も引き続き活動

〈海外派遣型 ― 12名〉

氏 名	プロフィール	活動国	活動期間
篠 まどか	俳人	フランス, イギリス, ルーマニア, ベルギー, ハンガリー, ドイツ	平成22年4月24日～平成23年3月25日
いわみ せいじ*	漫画家	シンガポール, マレーシア, 韓国, イギリス	平成22年8月4日～平成23年7月31日
藤間 万恵*	日本舞踊家	中国	平成22年9月4日～平成23年7月16日
佐々木 康人	華道家	ベトナム, シンガポール, タイ, マレーシア	平成22年9月9日～11月14日
糞 輪 敏泰	和太鼓奏者	メキシコ	平成22年9月20日～10月26日
笑福亭 銀瓶	落語家	韓国	平成22年9月30日～10月31日
山村 浩二	アニメーション作家	カナダ	平成22年11月12日～12月19日
安田 泰敏	囲碁棋士	オーストリア, スイス, フランス, ロシア, ヨルダン, イスラエル, モロッコ	平成22年11月15日～平成23年2月28日
野田 哲也	版画家	イスラエル, イギリス	平成22年12月3日～平成23年1月17日
山内 健司	俳優	フランス, ベルギー, ルクセンブルク	平成23年1月7日～3月31日
澤田 勝成	津軽三味線奏者	中国	平成23年2月20日～3月20日
津村 禮次郎*	能楽師	ロシア, ハンガリー	平成23年2月24日～4月9日

〈短期指名型 ― 4組〉

団体名	分野	活動国	活動期間
一般社団法人日本伝統芸術国際交流協会	沖縄舞踊	メキシコ	平成22年10月19日
財団法人日本余暇文化振興会	津軽三味線	メキシコ	平成22年10月23日
有限会社アトリエ・アサクラ	日本舞踊	韓国	平成22年10月28日, 29日, 11月1日, 2日
金春流能ドイツ巡回公演実行委員会	能	ドイツ	平成23年1月20日, 28日

平成23年度（2011年） ○派遣順 *印は、次年度も引き続き活動

〈海外派遣型 ― 6名・1グループ〉

氏 名／グループ名	プロフィール	活動国	活動期間
真鍋 尚之*	雅楽演奏家, 作曲家	ドイツ, フランス, オーストリア, スウェーデン, ロシア, ベルギー, オランダ, イタリア, スイス, ベラルーシ, チェコ, セルビア	平成23年5月14日～平成24年5月13日
時友 尚子	染色家	エストニア, ラトビア, リトアニア, フィンランド	平成23年10月26日～11月25日
薄田 東仙	書道家, 刻字家	イスラエル	平成23年10月27日～12月4日
辰巳 満次郎*	能楽師	韓国	平成24年1月9日～4月19日
AUN (井上良平, 井上公平, 齋藤秀之)	和楽器奏者	タイ, ラオス, ベトナム, カンボジア	平成24年1月21日～2月25日
塩田 千春	現代美術家	オーストラリア	平成24年2月7日～3月7日
佐佐木 幸綱*	歌人	ドイツ, ポーランド, スイス, フランス, オランダ	平成24年3月8日～6月4日

〈短期指名型 ― 3組〉

団体名	分野	活動国	活動期間
こでん 訃傳の会	人形浄瑠璃文楽（素浄瑠璃）	ドイツ	平成23年9月26日
ミュージック・フロム・ジャパン 推進実行委員会	雅楽	アメリカ	平成24年2月21日
特定非営利活動法人ACT.JT	伝統芸能, 大衆芸能	アメリカ	平成24年3月26日～28日

平成24年度（2012年） ○派遣順 *印は、次年度も引き続き活動

〈海外派遣型 ― 8名・1グループ〉

氏 名／グループ名	プロフィール	活動国	活動期間
えのき じゅん 榎戸 二幸	生田流箏曲	ドイツ, オーストリア, イギリス	平成24年5月28日～8月31日
うるま てるび（うるま, てるび）*	アニメーション・アーティスト	アメリカ	平成24年9月2日～平成25年8月31日
もとひこ 茂山 宗彦*	大蔵流狂言師	チェコ, オーストリア, ルーマニア, リトアニア, ポーランド	平成24年10月3日～平成25年7月3日
矢崎 彦太郎	指揮者	アルジェリア	平成24年12月6日～平成25年3月16日
えび はら りげん 海老原 露巖	墨アーティスト, 書道家	イタリア	平成25年1月20日～2月23日
よしかず 藤本 吉利	和太鼓奏者	中国	平成25年1月21日～2月21日
小島 千絵子	民俗舞踊家	スペイン, ポルトガル, ベルギー, イギリス	平成25年1月21日～3月11日
やま じ 山路 みほ*	箏曲演奏家	ロシア, ドイツ, イタリア, スイス, スロベニア, オーストリア, スロバキア, フィンランド, ラトビア, ハンガリー	平成25年1月27日～6月30日
大澤 奈留美*	囲碁棋士	アメリカ, ブラジル	平成25年3月14日～5月13日

〈短期指名型 ― 3組〉

団体名	分野	活動国	活動期間
くろもりかてん 黒森神楽アメリカ公演実行委員会	伝統芸能, 大衆芸能	アメリカ	平成24年10月31日
コンドルズ	舞踊	タイ	平成25年3月1日
公益財団法人せたがや文化財団 演劇		アメリカ	平成25年3月25日

平成25年度（2013年） ○派遣順 *印は、次年度も引き続き活動

〈海外派遣型 ― 8名〉

氏 名	プロフィール	活動国	活動期間
土佐 信道	明和電機社長, アーティスト	フランス	平成25年6月3日～7月11日
せき し 平尾 成志	盆栽師	リトアニア, イタリア, フランス, オランダ, アメリカ, メキシコ, オーストラリア, ドイツ, トルコ	平成25年6月11日～10月24日
そうらん 武田 双雲	書道家	ベトナム, インドネシア	平成25年7月31日～8月31日
えんとう レナード 衛藤*	和太鼓奏者	スイス, フランス, イタリア, チュニジア, ポルトガル, インド, オランダ, ドイツ, ハンガリー	平成25年8月8日～平成26年7月23日
森山 開次	ダンサー, 振付家	インドネシア, ベトナム, シンガポール	平成25年10月18日～12月3日, 平成26年1月4日～19日
はさ じゅん 挾土 秀平	左官技能士	アメリカ	平成25年10月19日～11月30日
みらい 森山 未来*	俳優, ダンサー	イスラエル, ベルギー, イギリス, スウェーデン, ドイツ, ロシア	平成25年10月21日～平成26年10月20日
長谷川 祐子*	キュレーター（学芸員）, 大学教授	アラブ首長国連邦, ドイツ, モロッコ, フランス, アメリカ, モナコ, アルメニア, グルジア, スウェーデン, ベルギー, イギリス, イタリア, 中国, チェコ, ハンガリー, スイス, ロシア, ポルトガル	平成26年3月12日～7月14日

〈短期指名型 ― 6組〉

団体名	分野	活動国	活動期間
びいまる ぎ 藝〇座	伝統芸能（日本舞踊）	スペイン	平成25年9月19日, 28日
チエルフィツチュ	演劇（現代演劇）	ギリシア	平成25年10月31日, 11月2日
小野雅楽会	伝統芸能（雅楽）	ロシア, ドイツ	平成25年11月12日, 14日, 18日
株式会社わらび座	舞踏（民族舞踊）	ベトナム	平成25年12月19日, 26日
山海塾	舞踊（舞踏）	インド	平成26年1月15日, 16日
声明の会・千年の聲	伝統芸能（宗教音楽）	アメリカ	平成26年3月7日

平成26年度（2014年） ○派遣順

〈海外派遣型 ― 8名〉

氏 名	プロフィール	活動国	活動期間
中澤 弥子 ナカヅ ムネコ	食文化研究者, 長野県短期大学教授	フランス, ドイツ, ポーランド, ハンガリー, イタリア, スロバキア, イギリス	平成26年8月10日～10月13日
林 英哲	太鼓奏者	アメリカ, トリニダード・トバゴ, キューバ	平成26年9月25日～11月4日
林田 宏之	CGアーティスト	クウェート, ヨルダン, レバノン, サウジアラビア, バーレーン, ベトナム, タイ	平成26年11月1日～12月14日
若宮 隆志	「彦十蒔絵」代表	イギリス, フランス, 中国	平成26年11月2日～12月3日
平野 啓子	語り部, かたりすと	ドイツ, トルコ	平成26年11月14日～12月15日
櫻井 亜木子	琵琶演奏家	エルサルバドル, ブラジル, アメリカ, イギリス, イタリア, スイス, アルバニア	平成27年1月7日～3月21日
岡田 利規	演劇作家, 小説家	中国, 韓国, タイ	平成27年1月12日～3月2日
山井 綱雄	こんばる 金春流能楽師	フランス, アメリカ, カナダ	平成27年2月1日～3月15日

平成27年度（2015年） ○派遣順 *印は, 次年度も引き続き活動

〈長期派遣型 ― 7名〉

氏 名	プロフィール	活動国	活動期間
青木 涼子	能×現代音楽アーティスト	アイルランド, フランス, ドイツ, デンマーク, イギリス, ハンガリー, イタリア	平成27年6月20日～8月9日, 9月17日～11月1日
柳原 尚之 さん きりやう し かつ	近茶流嗣家, 「柳原料理教室」副主宰	ニュージーランド, ブラジル, カナダ, アメリカ	平成27年7月29日～9月20日, 9月28日～11月8日
矢内原 美邦	振付家, 劇作家, 近畿大学文学部芸術学科舞台芸術専攻准教授	シンガポール, マレーシア, 韓国, タイ, ミャンマー, ベトナム, アメリカ, インドネシア, フィリピン	平成27年8月22日～平成28年1月31日
畠山 直哉	写真家	メキシコ, インド, フランス	平成27年9月2日～平成28年2月10日
小野寺 修二	コンテンポラリーダンス, マイム, 「カンパニーデラシネラ」主宰	ベトナム, タイ	平成27年12月15日～平成28年1月27日
藤田 六郎兵衛	能楽笛方 藤田流十一世宗家	イギリス, フランス, 韓国	平成28年2月23日～3月30日
吉田 健一*	「吉田兄弟」, 津軽三味線奏者	オランダ, スペイン, イタリア, ポルトガル	平成28年3月27日～5月25日*

平成28年度（2016年） ○派遣順 *印は、次年度も引き続き活動
 〈長期派遣型 ― 6名〉

氏 名	プロフィール	活動国	活動期間
佐野 文彦*	建築家, 美術家	イタリア, デンマーク, ベルギー, フランス, オランダ, アイスランド, ドイツ, 韓国, マレーシア, フィリピン, 中国, インド, エチオピア, メキシコ, アメリカ, インドネシア	平成28年8月20日～平成29年5月10日
土佐 尚子*	アーティスト, 京都大学教授	イギリス, 韓国, フランス, アメリカ, シンガポール タイ, フィリピン, ニュージーランド	平成28年10月27日～平成29年4月30日
柳家 さん喬	落語家	アメリカ, カナダ	平成29年2月5日～3月6日
佐藤 可士和*	クリエイティブディレクター	アメリカ, イギリス, フランス	平成29年3月18日～4月17日
藤間 蘭黄*	日本舞踊家	アメリカ, チェコ, ウクライナ, ポーランド, ハンガリー, スロベニア, フランス, ロシア, ドイツ, イタリア	平成29年3月29日～7月25日
山田 うん*	振付家, ダンサー	イスラエル, ジョージア, エストニア, アルジェリア, イギリス, ベルギー, スペイン, スリランカ, マレーシア, オーストラリア, アメリカ	平成29年3月29日～9月30日

平成29年度（2017年） ○派遣順 *印は、次年度も引き続き活動
 〈長期派遣型 ― 5名〉

氏 名	プロフィール	活動国	活動期間
増田 セバスチャン*	アートディレクター, アーティスト	オランダ, 南アフリカ, アンゴラ, アメリカ, ボリビア, ブラジル	平成29年9月21日～10月17日, 11月1日～12月19日, 平成30年1月2日～2月24日, 3月3日～4月1日
大友 良英	音楽家	アルゼンチン, チリ, ブラジル, メキシコ, アメリカ, イタリア, フランス	平成29年10月31日～12月13日, 平成30年2月1日～2月15日
種田 道一	金剛流能楽師	アメリカ, フランス, スペイン, イタリア, ハンガリー	平成30年1月20日～3月15日
鈴木 康広	メディアアーティスト, 武蔵野美術大学准教授, 東京大学先端科学技術研究センター客員研究員	アメリカ, カンボジア, ドイツ, アイスランド	平成30年2月12日～3月16日
本條 秀慈郎*	三味線演奏家	トルコ, アメリカ, イタリア, フランス, イギリス, ドイツ, チェコ, ロシア	平成30年3月12日～6月29日, 9月2日～10月17日

平成30年度（2018年） ○派遣順
 〈長期派遣型 ― 4名〉

氏 名	プロフィール	活動国	活動期間
玉川 奈々福	浪曲師, 曲師	イタリア, スロベニア, オーストリア, ハンガリー, ポーランド, キルギス, ウズベキスタン	平成30年5月27日～7月10日
田中 功起	アーティスト	アメリカ, スイス, ドイツ, ギリシャ, 中国, オランダ	平成30年7月1日～平成31年1月4日, 平成31年1月20日～25日, 1月30日～2月4日
笠松 泰洋	作曲家	エクアドル, アルゼンチン, チリ, ベルギー, イギリス, オーストリア	平成30年11月13日～12月14日, 平成30年12月31日～平成31年2月6日, 3月2日～3月24日
米川 敏子	生田流箏曲・地歌 演奏家	カザフスタン, イギリス, ドイツ	平成31年2月21日～3月22日

◎ 編集について

・文化交流使による活動報告は、筆者本人の表現を尊重しており、公文書上の表記方法等とは異なる場合があります。

◎ Note

- We respect the right of Japan Cultural Envoys to express themselves individually in presenting these activity reports, so please be aware that the terminology used may not necessarily follow official guidelines.

文化庁文化交流使フォーラム 2019 – 第 16 回文化庁文化交流使活動報告会 –

主催：文化庁 特別協力：東京国立博物館

Japan Cultural Envoy Forum 2019

Host: Agency for Cultural Affairs, Government of Japan Supporter: Tokyo National Museum



Agency for Cultural Affairs, Government of Japan

